
IS《インフィニット・ストラトス》～あるびのっ！ 祭～

水深無限風呂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS《インフィニット・ストラトス》あるびのっ！ 祭

【Nコード】

N0956Y

【作者名】

水深無限風呂

【あらすじ】

女性にしか反応しない世界最強の兵器「インフィニット・ストラトス（IS）」の出現後、男女の社会的パワーバランスが一変し女尊男卑が当たり前になってしまった時代。

しかし、この世界では女尊男卑の他にもある一つの変化が起きている。それは――

ひたすらにスピードを追い求める『変態機関』や、外見は軍事ISシェア第一位の優秀な企業だが、中を見れば『これは酷い』としか言いようが無い『変態企業』の出現。

この物語は『変態機関』に知らず知らずの内に入り込んでしまった
アルビノの少女の伝記。

※^{アルビノ}先天性色素欠乏症のオリ女主が原作に介入する話です。

※以前投稿していた『IS《インフィニット・ストラトス》《あ
るびのっ！》のスマート版リメイク作品となっています。

初式 チームメンバーは全員変態（前書き）

お久しぶりです。

今度は抑え気味かつ大胆に行きます。もう失敗なんてしない。何も怖くない。

初式 チームメンバーは全員変態

夜の並木道。

私の乗る車以外の車は一切見え、歩く人ももちろん居ない。

そして、覗く窓からは明かりのついた家はまだしも、明かりのついてない家すらも見えない。

見えるのは最低限整備された道路と、規則性正しく立てられた街灯ばかり。

何分か、何時間か。

いくら見続けても変わらない景色。

「今日の晩御飯、何がいい？」

景色を見続ける私に運転手……ニコラスがバックミラーでこちらの顔を見ながら話しかけてくる。

晩御飯って。

どうせ作るの私なのに。

そう思って黙っていると、向こうも気まづくなったのか、バックミラーから目をそらして再び前を見ながら運転する作業へと戻る。

うん、それでいいのだよニコラス君。

君は黙って運転してたまえ。

「あー……シエミー？」

「……んー？」

「……怒ってるか？」

「べっつにー」

どうやら無視したのが気になったらしい。

別に怒ってるわけじゃない。ただ返事するのが面倒なだけであっ

て。

……返事が面倒って。

典型的なコミュニケーション障害の症状じゃない……。

まあ、いいか。

どうせ別に学校に行くでなし、他者と交流するでなし。

毎日毎日兵器乗り回して、毎日毎日……。

もういい、考えるだけで死にたくなるほど憂鬱だ。

「……はあ」

思わず溜め息。

さて、暇だし私の身の内話でもしようかしら。

私の名前はシェミー。シェミー・アツシュダウン。先天性色素欠乏症^{アルビノ}がチャームポイントの遺伝子レベルで劣ってる女の子☆

こんなチャーミーな私だけど、生まれは田舎中の田舎。どれくらい田舎っていうと、未だに電気が通ってないくらい田舎。

そんな田舎に先天性色素欠乏症^{アルビノ}の少女が生まれればどうなると思う？

医学の知識なんて水で傷口を洗うことぐらいしか広まってない田舎。

そこで突然生まれた白髪赤眼の子供。

無論神格化されるワケよ。

私の髪は太陽のように輝くとされ、私の瞳は千里先まで見通し、未来すらも見透かすとされ、私の手は時を捻じ曲げるとされ、私の足は風の如きの速さで走るとされ、私の血は不老不死の秘薬とされた。

めっちゃくちゃなんてもんじゃないわ。

髪が太陽のよう……まあ、光の反射とかである程度は光るわよ。

でも太陽光は私にとって最も恐ろしいものだし……。

瞳が千里先まで見通し、未来すらも見透かす？ バカ言うんじゃない

無いわよ。眼前の文字すら読み難いわ。

手は時を捻じ曲げる？　どんな厨二設定よ、ありえないでしょう？
足は風の如き速さ？　バカ言え、ただでさえアルビノで太陽光に弱いから外出できないってのに、さらに食事は肉は食べちゃダメとかで体力がガタ落ちしてるんだから、そんなに早いワケないじゃない。

血は不老不死の秘薬？　水銀でも飲んでろ。

さてまあ、そのころの私の人生は幸福なのか不幸なのか分かり辛かったけれども。

大体八歳ぐらいかしらね。私の人生は思いっきり不幸な方向に倒れたわ。

理由は実に単純。

『吸血鬼』っていう話が村に入ったからよ。

吸血鬼。太陽光を極めて嫌う人ならざるもの。

そんな存在と私は『太陽光を嫌う』という一つの点で同じとされ、村から迫害。

そして苦しい日々。両親は働き詰め、それでも忌むべき子の親としてことで報酬は三分の一度度しか貰えなかった。

食物もなく、ただただ、苦しいだけの日々。しかも原因は私。

もはや飾り付けの偶像にもならず、今では逆に自分達を苦しめる、ただの役に立たない欠陥品と成り果てた私。

迫害されてから二年後。無論私は自分から家を捨てた。

私のような遺伝子レベルで劣っている存在のために、あの二人がボロボロになる姿が見るに耐えられなかったのよね。うん。

……んで、路頭に迷っていた私は運転手……まあ、ニコラスに拾われ、今に至るわ。

……絵空事みたいな過去だけでも、事実なんだから仕方ない。さて、私の事は話し終わってたわ、次はあなたのことを聞かせてちょうだい？

え、何？　友達いない？　引きこもり？　定職ナシ？　親の金食

って生きてる？

最低じゃないの。

……。

……。

私は一人で何を脳内妄想してるんだ。……あーもーヤダ。

「シェミー」

自己嫌悪に陥ってたところ、ニコラスがバックミラーではなく、実際にこちらを振り向きつつ私の名前を呼ぶ。

どうやら現在の我が家についたらしい。

我が家っていうか、我が機関？

一応説明しましょうか。

私が今到着した幽霊スポットにでもなりそうな、非常に古ぼけた施設。

その名は『シェミハザ機関 本部』。支部なんかないから本部って名前は意味ないけど。

まあ、そんな場所ね。……ちなみに補足するところこのリーダーがニコラスで、そのニコラスに拾われた私も当然この機関のメンバーよ。

んでもって、シェミハザ機関ってのは、現在における最強の兵器として世界のバランスを崩し続けるIS……正式名称イズ。じゃなくてインフィニット・ストラトスの研究と、世界で最も萌える二次元少女を研究し続ける愛と正義のイカ臭い変態機関よ。

さて、ついでだからISについても説明しようかしら。

IS。まあ、さっきも説明したけど、現状最強の兵器。元々は宇宙開発だとかなんだかのモビルスーツだかパワードスーツだかなんだかだったらしいけれども、結局は兵器として開発したほうが有用だってことで兵器化されたモノ……なのだけど。

ISには致命的な欠点があったのよね。うん。

それは『女性にしか動かせない』ってこと。

……なんで？ 知らんがな、女好きなんじゃね？

まあいいか、アルビノ系少女である私には関係の無いことだし。

兎にも角にも、ISは女性にしか動かせない。

……こんなところかしらね。

……………。

私はいったい誰に説明してるんだか、疲れてるのね。きっと。

あーもうだめだー。寝よう寝よう。夕食？ 酸素と二酸化炭素と

窒素でいいわよ。

ダイエットダイエット。これ以上痩せたら肋骨浮き出そうで怖い

けどダイエット。

……浮き出て無いわよね？

ちよつと服を捲って脇下辺りをチラリと見る。

……う、薄く浮き出てる……。

に、肉……肉を食わないと……。

ま、待て……。

ちよつと指でなぞってみる。

……凹凸あるがな。

やばいでしょ。痩せすぎ、痩せすぎ……マジで。

私が自分の体脂肪率の低さに危機感を覚えていると、コンコンと

窓を叩く音。

若干血の気の引いた顔でそちらを見れば、ニコラスが不思議そうな表情でこっちを見ていた。

どうやら先に下りて、施設内に入ったのはいいが、私が付いて来てないことに気づいて戻ってきたらしい。

「シェミー？ 何をやっているんだ？」

「い、いやあ。別に……」

捲っていた服を急いで戻し、車から降りる。

……ああ、どんどん鬱になってくよジョニー……。
若干ふらつく足取りで施設内へと入る。

「おう、シェミー。遅かったな」

施設内に入ってコンマ一秒。

このホラーチックなボロ施設に似合わないタコ坊主がヒョッコリと顔を現し、私へと話しかけてくる。

が、無視。めんどい。

一応説明すれば今話しかけてきた頭悪そうなタコ坊主の男の名前はボルゾイ。……まあ、ボルゾイってのは私が勝手に呼んでるだけなんだけども。

本名は知らない。知りたくもない。

「おいおい、挨拶もナシかよ？」

「うっせ、黙って掃除してなさい」

「あ？ 随分と反抗的だなあ、お嬢様よお」

ギロリとボルゾイが睨んでくる。恐らく気が弱い人なら顔を青くして逃げ出すであろう程の眼光。

お前はマフィアかなんかか。

……しかしまあ、こんな事を言われても別に恐れる必要はない。

ボルゾイはDMで足フェチの変態だし、それに無駄に筋肉付いてるけど基本的にデスクワードしかやらない人間だから。

ちなみに趣味で同人誌描いてる。私を主題としたヤツを描き始めたときに半殺しにしたのは記憶に新しい。

まあ短く言えば、コイツは見た目だけは結構アレだけれども、中身はキモオタで人を殴る程の度胸なんてない、と。

「おい、何とか言えよ？ あ？」

だけどU Z E E E E E E E E E E ! !

さっきのに紹介に追記。非常にしつこい。ねちっこい。きっとこのまま放っておくとずっと言っそうなので、何とか言うことにする。

「じゃあ……一言だけ」

「おう、言ってみろ」

自信満々に立ちふさがるボルゾイ。よし、一言言うぞー。

「私のニーソックス返して」

「まあ、元気そうで何よりだ。あ、そういや俺達は先に夕飯済ませちまったから俺達の分は要らないぜ」

「私のニー」

「さあ、今日はもう疲れたんじゃないか？ ゆっくりと休めや」

一言言った途端に表情を百八十度変えて、背中を押してくるボルゾイ。

返せよ。私のニーソックス。

まあ、いいか……今更返されても使いたくないし。

心底呆れつつも、背中を押すボルゾイに身を任せ、施設を奥へ奥へと進んでいく。

ひたすら奥に進んで私の部屋。

……私の部屋……というか、監獄？

なんせ、施設の入入口からは相当離れてるし、しかも異様に長いエレベーターを降りるし、入り口は電子ロックが三つ、鍵が三つ、ダイヤル式の南京錠を九つ掛かってる。

おかしいでしょ。

「……ねえ、いつも思うんだけど……。ここ完璧に監獄よね？」
「……まあ」

つい愚痴気味にボルゾイに聞いてみれば、苦しい表情で適当な答えが返ってきた。

何が「まあ」だ「まあ」。

「はあ……。こんなとこに入れなくても逃げないっての……」

愚痴を呟きつつも、電子ロックの番号を打ちつつ、三つの鍵を使い、南京錠も外す。

我ながら完璧な記憶力。うん。

ああ、ここで追記するけども、私には先天性色素欠乏症という欠点の他にも誇れる所が二つある。

まず一つめは記憶力。一度見ればそれだけで完璧に覚えるし、二度と忘れない。ちなみに私はこれを『ランニングラーニング完全記憶能力』と呼んでないわ。

で、二つめが身体能力。この五年間、毎日毎日ISを乗り回していたせいで、とっても鍛えられました。うん。オリンピック出場したい。ちなみに私はこれを『ドミナント超優性遺伝』と呼んでるわけがないわ。はい、自慢終了。寝よ寝よ。

ロックが解除された部屋の中を見て再び思う。

ああ、監獄っすね、これ、と。

ベットはパイプベットだし、それ以外服を詰め込むダンボールぐらいしかないし。

「どうみても監獄です。本当にありがとうございました」

「……監獄にはな、二種類あるんだよ。人を逃がさないための監獄と。人を守るための監獄がな」

ぼそつと呟くボルゾイ。

何言ってるんだコイツ。

まあいいか。

私は意味不明な発言をしたボルゾイのことを気にもせず、硬いパイプベットに横になる。

硬え。

床並みに硬え。

全く嫌なっちゃうね。もう。

ああ、嫌だ嫌だ……等と思いつつも、私の意識はだんだんと薄れていく。どうやら相当精神的にキてたらしい。

明日もまたIS乗ってIS乗って……まあいいか、明日のことは明日考えよう……。

◇

深夜。シェミーが寝付き、その後夕食を取ってなかったニコラスがインスタントラーメンを摂取し終えた後。

シェミハザ機関本部の会議室には五人の男が円形のテーブルを囲むようにして座っていた。

全員が真剣かつ、暗い面持ちで互いの顔を見合っている。

傍から見ればそれは今にも倒産しそうな大手企業の重役会議に近い物があった。

「……今日のシェミーの様子。どう思う」

「すごく……鬱っぱいです……」

だが、その会議内容は会社の倒産話、というよりも年頃の娘が分からずに悩む親同士の話のようなものだった。

「あれか、服か？ 服が足りないのか？」

「いや、違う……そう。あれだ。生ライブ」

リーダーのニコラス、そしてサブリーダーであるジャッキー共々に自分の想像上の十五歳の少女が欲しそうな物を思い浮かべ、口にするが、なんとなく違う気がして誰も触れはしない。

再び沈黙。

各々が頭を捻り、何がシェミィを喜ばせるかを一心不乱に考える中、堂々と腕を組み、自身満々な様子を見せる男がいた。

「バカだよな、お前らは……」

その男はそつと呟き、静寂にその言葉を響き渡らせ、他の五人の視線を集める。

「……じゃあ、お前の意見を聞かせてみる」

その男の名はボルゾイ。決して本名ではないが、ボルゾイで構わないだろう。

「ふっ、スポーツだよ、スポーツ……いや、どっちかって言うとかチアガールだな。きつと赤と白とか青と黄とかの目立つ色のミニスカとノースリーブの服とか着ちゃって、こう、跳ねたり……跳ねたり……」

ボルゾイの極めて変態的思考の下に弾き出された答えに、一同は軽蔑の視線を送る。

そして、はぁ。と溜め息を吐きながらもニコラスはゆっくりと口を開き、自分の意見を口にする。

「それはお前の願望だろ？ ……いやでも、跳ねた時に服が風の抵

抗を受けて少しだけ上にズレて……あの白魚のように白いおなかが見えるのかと思うと……胸が熱くなるな」

ニコラスの極めて変態的思考の下に弾き出された答えに、一同は軽蔑の視線を送る。

そして、はあ。と溜め息を吐きながらもサブリーダーであるジャッキーはゆっくりと口を開き、自分の意見を口にする。

「この変態が！ まともに考えろよ！ シェミーが可愛そうだと思わないのか！？ ……いやでも、跳ねた時にミンスカが若干捲れあがって……あの白蛇のように艶かしい足が見えるのかと思うと……胸が焼け落ちるな」

ジャッキーの極めて変態的思考の下に弾き出された答えに、一同は軽蔑の視線を送る。

そして、はあ。と溜め息を吐きながらも技術担当の通称『チャリ廃ポケの伝道師』はゆっくりと口を開き自分の意見を――。

「まったく、君達は何を考えているんだい。年頃の女の子と言ったら海だろ？ 海に言って露出度の高」

「もういい、大体分かる。私もそれは見たい。だがそれは現状を打破することができた後の楽しみに取っておこう」

言えなかった。

「い、水着を来たシェミーがチャラそうな男二人にナンパされてあたふたと焦っ」

が、その静止を振り切ってチャリンコギコギコ廃ポケの伝道師は自分の欲望をはき続ける。

「もういいと言ったのに続けるな！ この変態が！」

そんな廃^{チャリンコギコギコ}ポケの伝道師に同属嫌悪から来るのであろう不快感を覚えたニコラスは、手元にあったペットボトルを廃^{チャリンコギコギコ}ポケの伝道師へと投げつけ、その話題を終わりに――。

「ああ、なるほど……そのあと押し切られて人気がない場所で体中を撫で回さ」

できなかった。

機体整備担当のエドガーは廃^{チャリンコギコギコ}ポケの伝道師の落とした話を見事回収し、自己流アレンジを加えつつ、更に話を展開する。

「エドガー、お前もか！」

そんなエドガーへと今度はサブリーダーのジャッキーがペットボトルを投げつけ、今度こそ話に終止符を打つ。

「……さて、もとの話題に戻すぞ……」

「ああ、確か……サンタコスをしたしえみたんがマジしえみしえみっという」

「地獄で私に詫び続けるジャッキイイイイ！！」

リーダーであるニコラスがサブリーダーであるジャッキーを殴り飛ばす。

なんとも連帯感が取れてなく、尚且つ似た者同士の集まりの機関である。

「殴ったな！？ 友人には殴られたこともないのに！」

「まあ、それは……お前に友人なんかいないからな」

「……反論できない、死にたい」

「けどまあ、そんなこと言っちゃったら俺達全員友人とかいねえけどな！」

「「……………」」

なんとなくか、確信犯か、あるいは笑いが起きるとでも思ったのかは分からないが、ボルゾイのその一言により若干盛り上がっていたシェミハザチームの士気は再び地の底に叩き付けられる。

「……はあ、まあいい。……そういえばネイサン。お前はずっと黙ってるが、何か意見はないのか？」

かなりのローテンションでニコラスは、ずっと黙り込んでいる医療担当のネイサンへと意見を求める。

そこでネイサンは「やっとか」と言わんばかりに目を光らせ、自信有り気な表情と共にゆっくりと口を開いた。

「……今日のシェミーの髪の毛の香りと体脂肪率……、更には脇の味と血圧……、そして抱き心地と直に触って計った体温から考えるに……」

「待て、考える前に何をやってるんだお前は！ 匪賊には誇りも無いのか！？ 幸せそうだな、羨ましいよ！」

とんでもない水素爆弾級の発言をしたネイサンに、ニコラスは嫉妬と怒りを混ぜつつ、罵倒を浴びせる。

そんな罵倒に怯みもせずにネイサンはニヒルな表情を浮かべて一言。

「……何って、ナニに決まってるじゃないか」

極めて変態的な発言だった。

「やかましい！ ……どうやってやった!？」

そして、それに対し今度は強烈なストレートから復帰したジャッキーがツツコミをいれる。

「ああ、シェミーは貧血で朝弱いからそこで若干強気にかかれば楽勝よ。腕の中で恥ずかしがる姿は格別だったぜ……と。さてまあ、タネ明かしもしたんだから俺を責めるなよ？ それよりシェミーだろう」

実際には座っているパイプ椅子で打ん殴って半殺しにしてやろうかと考えていたネイサン以外のメンバーだったが、最後の言葉に少しだけ待つ事を決める。

——それは逆から言えばマトモな意見が出なければ半殺しにする。ということなのだが、ネイサンはそれでも自信満々の表情を崩さずにゆっくりと自分の意見を述べ始める。

「シェミーに今、もっとも足りないもの……。それはまあ、服や生ライブみたいな趣味も足りちゃいないし、スポーツやチアガールみたいな健全な運動も足りない。だけどな、いっちばん足りてないのは……同年代の『友達』ってヤツだよ。俺達は十五ぐらいからは画内内の友達で満足してたが、シェミーは違う。本当は学校とか行つて、人並みに友達とか作らないと満足できないんだよ……。あと、恋人とか」

極めて。

というか、唯一のマトモな意見に他のメンバーは目を円くし、し

ばらく思考を停止する。

だが、そんな中でニコラスだけは即刻復帰し、自分の意見も添えることにする。

「なるほど、な……。必要なのは友人と百合展開か……」

極めて。

というか、やはりマトモではない意見に他のメンバーは耳を傾けず、相変わらず思考を止めている。

だが、そんな中でネイサンだけは怪訝そうな表情を浮かべ、反論をする。

「いや待て、俺は百合展開なんて一言も言っていないぞ？」

「……HA？ 恋人って言ったじゃないか」

「なんでお前の中じゃ同性愛が基準なんだ！」

「違う！ 同性愛が基準じゃない！ でも、女の子は女の子と絡み合ってるほうがイイじゃないか」

「……はあ、もう何も言わん……。好きにしろ……」

ニコラスの変態的思考にネイサンは頭を抱え、話題を投げる。

それを良しとし、ニコラスは自分の意見を述べ始める。

「さて、これからのシェミーだが……。そうだな、やはり……。学校に通わせるのが一番だろう」

「……待て、通わせるなら普通の学校は無理だと思うぞ。ISを所持していることがバレれば……。最悪『ヤツ等』に居場所を特定される」

「まあ、そうだろうな……。それに男なんかが住み着いている普通の学校に私はシェミーを行かせる気など毛頭ない」

ジャッキーに指定された事に頷きつつも、自分の意見を変えない

ニコラス。

そんなニコラスに若干の不信感を抱いた他のメンバーは、各々でニコラスが何を考えているかを探ろうとする。

「……じゃあどうするんだ？」

「まだ分からないのか？ 必然的に女子校となっていて、尚且つ I S を所持していてもなんら疑われない夢の国……」

「ハッ……まさか……！！ デイズニ」

「それ以上言うな馬鹿者オ！！ 『ヤツ等』以上に危険な奴等に特定されるだろうがぁ！！」

世界の禁忌に触れる呪いの言葉を発しようとした廃^{チャリンコギコギコ}ポケの伝道師をニコラスは殴って黙らせる。

他のメンバーは考えていたことを違うと言われ、更に悩み始める。

「本当に分からないのか！？ じゃあ更なるヒントだ。……そう、アレは我等が聖地……日本にある」

「……！！ そうか、なるほど……」

「ふん、やっと分かったようだな……エドガー」

「ああ、藍越学園だな」

「……何処……？」

「えっ……違うのか……？」

「いや、何処……？」

意味不明の名前を挙げたエドガーにニコラスは呆気を取られたが、即座に呆れ、何故ここまで来て分からないのか、と若干苛立ち始める。

「……まさか……」

「おお、分かったか？ ジャッキー……期待するぞ？」

「新しく日本に女子校を……!!」

「そんな資金など何処に存在するんだ馬鹿愚か者がアアアア!!」

斜め上の発想というよりも、むしろ手前側に飛び出るような発想をしたジャッキーの腹目掛けてニコラスは鋭い蹴りを繰り出し、いよいよもう苛立ちが頂点に達したので、自ら答えを発表することにする。

「IS学園だ! IS学園!! あそこに入学させればいいだろう!」

「……あ。そんな単純な答えだったのか……」

「なんだ……苦悩して損したぜ……」

「お前等はドンだけ私の思考がぶっ飛んでると思ってるんだ!」

「サターンロケット並……かな」

「よし、通信教育で習った私のガン・カタを披露する時が来たようだ……」

バキバキと勢いよく指の骨を鳴らしながら、ニコラスは立ち上がる。

——ちなみに、この後の戦いは朝まで終わる事はなかったという。

そして、朝には誰もが満身創痍で倒れていたという。

二式 地獄のフライトへようこそ！

朝のシェミハザ機関本部、シェミー・アッシュダウンの部屋。

さすがのシェミハザ機関と言えど、この早朝から施設の最深部に位置するシェミーの部屋は極めて静かである。

まるで全ての時が止まったように、地球が自転を止め、そして公転さえも止めたような静寂の中、シェミー・アッシュダウンは死んだように寝続ける。

その肌の元々の色合いも重なり、呼吸と共に胸が若干上下していなければ死体にも見違えるだろう。

それほどに今のシェミーの存在は脆く、躍動感は死んでいた。生き物らしさは全く感じさせず、無機質で精巧なビスクドールの如き静けさと、美しさを兼ね備えた体。

一人は『神の造形物と呼ぶに相応しい姿』と呼び、一人は『生氣を感じぬ人ならざるおぞましき姿』と呼ぶ。

そんな表と裏の姿を見え隠れさせるシェミーの下に、一人の男が近寄る。

死んだように眠るシェミーは気付きもせず、寝返りもせず、寝言も言わず、手を胸の上で組んだまま死人の如く寝続ける。

男はそんな姿を眺めつつ、シェミーの眠るベットへと腰掛け、ゆっくりとシェミーを抱きかかえる。

「……んう……？」

初めてそこでシェミーは言葉のようなものを発し、若干表情を歪ませる。

だが、その表情はすぐ安らぎへと戻る。

男の腕の力強さ、そして同時に与えられる優しさ、その二つがシェミーの深層に眠る記憶を呼び起こしたからだ。

「お父様……」

消え入るような声でシェミーは呟く。

そして、その呟きに連鎖し、数々の暖かい記憶がシェミーの中を駆け巡り、意識を覚醒へと導く。

暖かな記憶の中、シェミーは徐々に世界へと意識を引き戻し、ゆっくりと瞳を開ける。

「お父さ」

瞳を開けつつ、その名をもう一度呼ぼうとして不意にシェミーの口の動きが止まる。

何故か。

それはシェミーの視界に飛び込んだものが原因である。

シェミーの視界に飛び込んだもの。

それは――。

――監獄チックなシェミーの部屋に似合わないタコ坊主。

「……」

「お、おう。おはよう。シェミー」

「その命、散らすが良い。暗月の剣の名の下に」

その名はボルゾイ。本名ではないが、別に構わないだろう。



「……アイツ。マジで行きやがったのか」

「ああ、ネイサン。ヤツは行ったよ」

「バカがっ……、全部嘘だったのに……!! 真に受けやがって…

…!!…!! 朝弱いんだったら超不機嫌に決まってるだろうが……
」

シエミハザ機関の朝は早い。

未だ日が出ているかも怪しいような時間にメンバーは全員目を覚まし、キャリアケースに自分の荷物を積み、一つの部屋の前に集まっていた。

その部屋とは、無論シエミー・アッシュダウンの部屋である。

「まあ……本当にいい奴だったよ……バカだったけど」

「ああ、絵が上手いこと以外何にも取り得がなかったが……いい奴だったな」

「……ネンドール並に好きだったよ、僕は」

リーダーのニコラス、サブリーダーのジャッキー、技術担当の廃^チポケの伝道師、機体整備担当の

エドガー、医療担当のネイサン。各々が恐らく死んだであろう『彼』に向けて言葉を送る中。

『その命、散らすが良い。暗月の剣の名の下に』

シエミーの部屋の中から地底の呻き声のような声と、凄まじい叫び声が響き、直後。

どぐじゃ、という生々しい音と共に高速で何かが鉄製の壁へと直撃した。

恐らくドアが開いていなければ即死だったであろう。

「があああ………い、生きてる……生きてるけど……死んだ方がマシ……いいいい……」

地面で蹲りつつ、痛みを訴えるタコ坊主。

その名前はボルゾイ。本名ではないが、別に構わないだろう。

「拾って保護してくれたこと、ISを与えてくれたこと……感謝はしていたのだから、感謝は……」

そして次に、冷徹な声色の呟きと共に真紅の鎧に身を包んだシェミーが部屋の奥から現れる。

その鎧の名前は『傷口箱』スカーレッド・ボックス。このシェミハザ機関が唯一有するISであり、また、シェミー専用の機体……つまるところの専用機だったりもする。

ちなみに専用機というのは本来、国に選ばれた優秀なエリートの方に与えられる物だが、無論このシェミハザ製であるISは非公式であり、日の光を不用意に浴びれば蒸発させられるだろう。

表に出れない点では持ち主に似た機体とも呼べる。そうだった

「まあ、待て。落ち着けシェミー。貞操は無事なんだから」

「黙れよ、亡者が……。貴公等の命の価値もそこの愚者の命の価値も大して違わぬのだよ」

未だボルゾイに追撃を仕掛けようとするシェミーをシェミハザ機関のメンバーは全員で制止し、何とか落ち着かせる。

「……はあー、……次にこんな事があればマジでブチ殺しますよ……っと。っていうか、ヤケに早いわね……まだ……五時？　五時い？　何でこんな時間に……あー眠い、ふざけんなよ……」

クシャクシャと頭を掻き乱しながらシェミーは不満をぶちまけ続ける。

それに対し、ニコラスは若干自信有り気に胸を張りつつ、不貞腐

れるシェミーへと話しかける。

「シェミーよ、最近暇じゃないか？ 飽きてきてないか？ 毎日毎日同じことの繰り返しに飽き飽きしてないか？」

「それよかあんた等の変態的性癖をなんとかして欲し」

「暇だろう？ 暇なんだろう？ 飽き飽きしてるだろ？」

「いやだからあん」

「そうか、暇か暇か！ 飽きたか！」

シェミーは最初から意見を聞く気がないニコラスにうんざりしつつも、決して的確を射ていないワケではないので、渋々頷く。

そんなシェミーを見て、ニコラスは長い溜めをいれつつも、つい先日決定した事項を述べる。

「ならば、安心してくれ。シェミーよ。今年より、君にはIS学園に入学してもらうっ！」

「は？」

ニコラスの発言に対し、シェミーは両手を肩の高さまで上げ、小首を若干傾ける『お前何言ってるんだ』あるいは『冗談だったの』のポーズを取る。

「はあ、悪い冗談はやめなさいよ。そんな事を言う為にこんな時間に起こしたの？」

「騙して悪いが本気なんでは……、荷造りをしてもらおう」

ポーズを取っていたシェミーはニコラスの一言で固まる。

そして数秒その状態を維持し、ぐぐぐ……という擬音が似合うほどにゆっくりと振り向く。

「……まさか……そんな……本当だと言うの!？」

「ああ、本当だとも」

「が、学校に通うの？ 私が？」

「ああ、通うともさ」

ニコラスの言葉にシェミーは一瞬顔を綻ばせるが、直後に暗い表情をする。

「……いや、無理だろ……この見た目だぜ？ イジめられるのがオチだって……、っーか外出できないし」

自分の腕を指差しながら自嘲気味にシェミーは言う。

アルビノ……先天性色素欠乏症は日焼けやDNAの破壊などの紫外線の与える害から身体を守る『メラニン』が極めて少ない、あるいは欠乏しているために通常の人間が浴びても何もない量の紫外線……つまり、日光ですら、酷い日焼けを起こす他、先述したように紫外線のDNAの破壊を防げない為に皮膚癌に非常になりやすい。つまり、日光を浴びることは自殺行為に等しいと捉えれば間違いない。

ちなみに、他にも視覚にも様々な症状が出るのだが、これに関してはシェミハザ機関が尽力を注いで作り上げた特殊なコンタクトレンズがあるので、説明を省く。

「イジめられるかどうかは分からないが、多分お前の性格なら大丈夫だろう。むしろイジめる側だろ……お前は……。そう、それと外出関連なら大丈夫だ。日光という存在を消し去るかにようにカットし、更には水を浴びても何をされても、セットの洗剤を使わない限り落ちなく、更には塗ってあるか塗ってないかの判断が不可能なほど違和感がない……もはや日焼け止めクリームの領域に収まってるかどうかとも分からない日焼け止めクリームがここにあるからな……」

「……どうやって手に入れたのそれ……？ 詐欺じゃね？」

あまりにも高性能かつ現実離れした日焼け止めの性能にシェミーは疑うような視線と言葉を送るが、ソレに対してニコラスは自信有り気に答える。

「いいや、詐欺なはずがない……何せ我々が作ったんだからな！」

「さすがシェミハザ機関！ 意味が分からない！」

「ちなみにネイサンが一晩でやってくれた」

なんとも仕事が速い人間である。

そして、シェミーはそんな夢のようなモノを作り上げたネイサンに思わず惚れ込みそうになる。

「私……ネイサンのお嫁さ」

シェミーがシェミハザ機関を崩壊させるような5t級の爆弾を投下したところ、シェミハザ機関面々の表情は一気に険しい物となる。

「ネイサン……悪いが、明日から君の居場所ここにはないから」

と、ニコラス。

「悪いな、ネイサン。楽しかったぜ」

と、ボルゾイ。

「じゃあな、ネイサン。死ね」

と、ジャッキー。

「死ね！ 死ね！ シェミーを専有する奴はみんな死んじゃえばいいんだーッ！！」

と、エドガー。

「死ねイサン」

と、チャリンコギコギコ廃ボケの伝道師。

「お前等が何と言おうとシェミーは俺を選んだんだッ！ 貴様等の負けだよ！ ハハハハハッ！！」

様々な事を言われたネイサンだが、その表情は勝ち誇った笑みであり、内心でも優越感に浸っていた。

「いや、人の台詞は最後まで聞けよ。私……ネイサンのお嫁さんになりましたそうな人が居れば紹介してあげる……って言うつもりだったんだけど……。いや、正直に言わせてもらえば、こっちがぐっすり寝てる間に部屋に入ってきて身体の診察するような奴とは絶対に結婚したくないです。っていうかさ、こっちが眠くて抵抗しないのを良いことにイロイロやってくれたわね、ホント。まあ、それもその夢のような日焼け止めクリームを作るためにやったことなんだと思えば我慢出来なくもないけど。とりあえず一言だけ言わせてちょうだい、死ね変態」

だが、そんなネイサンを蹴落とし、面々の暴走を止めるシェミーの言葉。

そんなシェミーの言葉に二重の意味でネイサンは傷つき、がっくりと地面に膝をつく。

「ネイサン。今度マツク奢るぞ」

と、ニコラス

「ネイサン、日本にいたら何か一つ買ってやんよ」

と、ボルゾイ。

「ネイサン、今度夕飯奢るぜ」

と、ジャッキー。

「ネイサン、後でバッチ一個あげるよ」

と、エドガー。

「ごめんねイサン」

と、チャリンコギコギコ廃ポケの伝道師。

「……お前ら……ありがとう……。エドガーのバッチとチャリンコギコギコ廃ポケの伝道師の意味不明な略語以外は全部嬉しいよ」

こうして、シェミハザ機関の面々は再びその絆を深めるのであった。実にめでたい。

「……さて、そんなクズみたいな茶番はどうでもいいのよ。で、何だって？ 私がIS学園に入学？ あのエロゲ校に？」

「そう、本当なら私達も教員として配属されたいが、何分、免許を

もってないもんでね……。残念だがシェミー一人で入学してもら
よ」

「いや、むしろ嬉しい。あんた等と離れられるなんて最高じゃない
の」

「……………。まあいい、とりあえず荷造りしてくれ、飛行機の時間
に間に合わなくなる」

「荷造り、荷造り……。ねえ。まず愛用のPCでしょ、あと衣類。…
…荷造り終わったんだけど。ダンボール一個に収まったんだけど。
ねえ、これどうなの？　ねえねえ。何かイロイロ足りなくない？
ぬいぐるみの一つもないぜ？」

「……日本に行ったら買わせていただくので許してください……。お
願します……」

「よし、このパイプベツトを運んだら許してやる」

「有難き幸せっ……」

といった風に三時間は掛かるだろう、と思われていたシェミーの
荷造りは五分で終了し、余った175分をどうやって過ごすか……
という疑問だけがシェミハザ機関の面々に残ったのは言うまでもな
い。



という出来事が朝あったワケです。

おはようございます。シェミー・アッシュダウンです。

……誰に挨拶してるのよ、私は……。

まあいいか、ちなみに現在地は空港。国際じゃない空港。違法の
香りがぷんぷんするぜ！

「……なんで国際空港使わないの？」

「それはね、シェミー。お前のパスポートと戸籍がないからだよお

おおおおお！！」

「な、なんだってー！！」

いや、よくよく考えれば普通か……、だって出身地は電気も未だに通ってない未開拓の村。そしてその後は意味不明な変態機関に所属。パスポートも戸籍もないわけだ。

そんな私でも受け入れてくれるIS学園。かっこいい！ 惚れちゃいそうだぜ！

「それにしても遅いわね、本当に来るの？ パイロット」

「ああ、来るともさ。実は、私の父親が逆坂重工ってところの社長の友人でね、それでいて、その娘がパイロットやってるらしくてな。今日はその娘さんに厄介になる」

サカザカ重工って、名前からして日本よね……？ なんで知り合いな……？

あ、ちなみに物凄く今更だけどシエミハザ機関の奴等は全員日本語が標準よ。

どっただけ日本好きなんだよ。

「ちなみ言えば、俺の妹もパイロットなんだが、電話したら『ヤダ』と何も言っていないのに断られた」

ジャッキーが「H H H H H A ……」と哀愁漂う乾いた笑い声と共に聞いてもないことを言ってくる。

というか、妹居たの？ 初耳なんだけど。

「ああ、そういえば私の娘もパイロットなんだが……行方不明でな」「パイロット率高っ！？」 っていうか行方不明って！ というかあらんたに娘が……いや、結婚してくれる女性が居たのが驚きよ」

「騙して悪いが養子なんでな、納得してもらおう」

「ああ、なるほど」

養子で、何する気だったんだこの変態。

「……おっと。どうやら来たようだぞ」

とかなんとかバカなことやってると、ニコラスが一声。

私もニコラスが向いている方向を向いてみれば、黒い長髪の女性……というか身長以外は少女と、短いショートカットの茶髪の女性……というか胸以外は少女な二人が此方へと歩いてくる。

「……ねえ、二人いるんだけど」

「……どっちが娘さんだろうな」

日本人なんだろう……？ いやでも、どっちも顔は日本人っぽくねえ！ ハーフか……。いや、ハーフにしてもどっちもわからん！

どっちだ……。？ っていうか近づいてきてだんだん分かったけど……黒い長髪の方の目赤い！ 何だよ！？ 髪色からして明らかに色素足りてるだろ！ カラコンか……。髪を染めたか……。

茶髪の方は目は茶色……。日本人だとすれば珍しいけど……。ハーフならそうでもない。クォーターですら茶色程度ならよくあるし……。

……どっちが『サカザカ』なんだ……？

というか何故二人なんだ？！

とかなんだか思ってる間に件の二人は手と手が届く程度の距離まで接近してきた。

「どうも、本日副操縦士を勤めさせていただく逆坂^{さかざか}天名^{あまな}です、どうぞよろしく」

「同じに本日操縦士を勤めさせていただくユデイト・ボーデヴィツヒです。ちなみに染髪です」

件の二人は友好的な笑みと共に自己紹介をしてくる。

茶色が日本人だったか……いや、名前からして明らかにハーフだろう。アマナ？ 逆坂アマナて。

どこぞの羽生蛇村ニュートランスレーションのあれかよ。

……そして黒髪の方は……ドイツ？ ボーデヴィツヒってドイツだろう。多分。

そして聞いても居ないのに染髪宣言してきやがった。意味が分からない。

「一人と聞いていたが……？」

「あはは、すみませんねえ。日本に行くって言ったらユデイトがどうしても付いて行くってうるさくって……」

「とかなんとか言ってるだろう？ コイツ、操縦面倒だからわたしを呼んで操縦士やらせてるんだぜ？」

「そんなことないだろ。だってお前……ドイツに居場所ないから日本行きたいって言ってたじゃないか」

ニコラスの質問に対し、軽い調子で答える二人。だが、その会話内容はひじょーに危険だと思う。

……本当に大丈夫なの、こいつ等……。

不安になってきたわ……。

「あ、ちなみに安心してください。確かにユデイトは問題を起こしすぎて部隊から弾かれましたが、腕前は最高級ですので」

そんな私の心を見透かしたように逆坂天名は私へと満面の笑みで話しかけてくる。

何が安心できるんだ！？　その言葉で！

「チッ、うるさいなあ。お前だってアレだろ。逆坂重工最近倒産して以来ホームレスじゃないか」

「黙っとけ」

問題を起こした事を言われたのが気に食わなかったのか、ユディトはつまらなそうな声で再び不安になるような事を呟く。

……倒産してるのかよ……。

……ダメだ、こいつ等はダメだ。

「ねえ、ニコラス。今からでも遅くないと思うの。偽造でもいいからパスポート作って国際空港に行きましよう？」

「そんな大金はないっ……偽造パスポートなんか作る度胸もないッ！」

私の必死の願いに対して、ニコラスは自身満々に答える。

このヘタレ！

しかし……こいつ等はダメだろう。多分絶対ダメだ……。

「ああ、すみませんね、時間取らせちゃって。早速行きましようか」

い、行きたくねえ……。

絶対他のメンバーも……さすがにこれには乗れないだろ……。

と、思って回りを見渡せば。

全員がジェット機に乗ってるワケですよ。

……なんでだよ！

くそう……絶対ヤバいって……これ……。

などと思いつつも渋々乗り込む。怖いなあ。

乗り込んでみて分かったが。

これはワリと大丈夫かもしれない。パイロットには不安を抱くが、このジェット機はワリとマトモそうだ。

そう思って最前列の右側へと腰を下ろす。うん、中々の座り心地で、次にシートベルトを……、ん？ シートベルト何処よ、これ。一回席から立って探してみたが、シートベルトらしきものが見当たらない。

……この感じ……イヤだな……。

そして、そんな私の感情を読み取ったかのように操縦席からひよっこりと天名が顔を出す。

「えーっと、すみません、これ逆坂重工の商品なんですけど、シートベルト無いんで注意してくださいね」

そして満面の笑みで欠陥品宣言。

欠陥品だアアア！！

まて、これは死ぬ！ 絶対死ぬ！ 操縦者だけじゃなくて機体もダメだった！！

今からでも遅くないだろ、降りようぜ！？ おい！

と、思って回りを見渡せば。

全員ともリラックスして寝てるんですよ。

……おかしいよ！

「さらっとトンデモない事を言うんじゃない、それよりも……これどうやって動かすんだろうな？」

「操縦法分らないのか！？」

アマナがツッコんだけど。

操縦法知らないの！？ なら何で来たの！？ おかしいでしょ！？

「だって、IS使えばいいし……」

専用機持ち!?

「お前のISは飛べないだろう」

飛べないIS!? 聞いたことが無い! いや、それISじゃないだろもう!

「シュトルヒ朱嘴鶴なのにな。コウノトリなのにな。なんでだろうな」

「ダイバージェンスが足りないんじゃないかね?」

「それだ」

それだ じゃないわよ……。意味が分からないよ……。

もう、なんか泣きそうだわ……。何なのコイツ等……。

ヤバイよ……。

とかなんとか思いつつコクピット見てみたら、順調に離陸準備が進んでる。

あ、なんだ。操縦法知ってるんじゃない。悪い冗談はやめなさいよ。

「あれ? 動かし方知らないんじゃないのか?」

「ああ、だから感でやってる」

感……だと……!?

「やめてくれ、爆発したらどうする」

爆発!?

「わたし達は永遠に結ばれるだろう」

「黄泉の国で？」

「三途の川でビーチバレーやろうな！」

「ユディト、それビーチちゃう、リバーや」

「リバーでバリボーしたらリヴァイブしねえかな」

「するワケがな」

「ファン回しまあああつす！！」

「聞けよ！」

「行きまああああつす！ 3. 2. 1 GO！^{ガオ}」

……ああ、何だか遠いよ……ニコラス……ネイサン……ジャツキ
……^{チャリンコギコギコ}廃ポケの伝道師……エドガー……あとオマケでボルゾイ……。
なんでお前等は寝てられるんだよ……。そのまま黄泉の国にGO
かよ……。

「YES！！ 空に行けるよ！」

「やったねユディちゃん！ ……操縦法分からないの？」

おいバカやめ……もういいや、もう疲れたよ……なんで私がツツ
こまなくちゃいけないの……？ おかしくない……？

ああ、地上からどんどん離れていく……。

「わたしにもーただ一つのー願望がー持てるならー♪」

「操縦法ー最初からをー本にしてー窓辺で読むー♪ て、誤魔化す
な」

とても意味の分からない誤魔化し方ね。うん。誤魔化したの何か
アマナの方だし。

ああ、疲れた。私も寝るかな。うん。

「いけるいける。OKOK。これオマエの所の機体だし、オートパ

イロツトぐらい付いてるだろう？」

あ、なるほど。オートパイロットかあ。そうだね、オートパイロットなら安心だね。

「おっと、神は私達を見放したようだ……逆坂重工にそんな技術はない」

「なん……だと……」

だと思ったぜ畜生！ マジで死ぬだろ、これ！？

「はははははははは！ 死亡フラグ立ったー！ DEAD ENDのフラグ立ったー！ くはははははは！ ……………日記に書かれてないぞこんなのオオオオ！！」

「落ち着け天名ッ！ ラウラ助けてラウラ助けてラウラ助けてラウラ助けてラウラ助けて……」

いや、お前等二人とも落ち着けよ、と。ラウラって誰だよ……。嫁？

「お前が落ち着け！ せ、説明書……説明書を探すんだ……」

「急いでくれ！ 下手に動かすとヤバイと思うと体が動かん！ 筋肉が硬直してしまう！」

……普通離陸する前に説明書探さない？ ……っていうか、説明書って……。電子レンジじゃないのよ……？

「聞こえる、ユディト？ 説明書がない」

しかもなかったッ！ おかしい！

「もっと良く探さんかあああああ!!」

「あった跡は見える……だが、これはダメなんだろう？」

良いワケないだろ!? 何なんだよコイツ等! 死んだ……もう死んだよこれ……。

「クソッ……説明書がなくちゃわたしは運転もできないのかよ!」
「もう地面が殆ど見えない……生きて地上に立てるのかこれで……!」

無理に50ペセタ賭けるわ。うん。

「悪いね、へぼパイロットで……機体だけは、一流のところを見せてやるぜ!」

なんて言葉と共に。グッとレバーを押し倒すユデイト。

……なんで勢いに任せてそういうことやってしまうん?

直後、ぐうっと後ろに引かれる。恐らくはスピードアップしたのだろう。うん。

「ユデイイイイッツツツツ!! 何をしたアアアア!?!」

「フルパワーだぜ! 信じらんねえ!!」

信じらんねえ!! じゃないわよ! こっちのが信じられないわよ!

……あ、ああ。もうだめだ。ああ……。死ぬ前にブーメランで遊びたかった……雪男に会いたかった……。

まあ。

結論から言わせてもらえば……日本には着いたし、ユデイト、そ

れに天名とメルアドの交換ともしちゃったりなんかしたけど。

……二度とコイツ等の操縦する機体には乗りたくないね！

二式 地獄のフライトへようこそ！（後書き）

今回登場したパイロット共はボツになった『IS<<インフィニット・ストラトス>>』がちがちっ！』の主人公等だったり。

ちなみにソッチの方だとこの後ジェット機はバラバラに碎け散りました。

三式 織斑との遭遇（前書き）

未知との遭遇。そしてごーるでんへあーろーるらーじちえすとー星
人の襲来。

三式 織斑との遭遇

はろー、シェミー・アッシュダウンよ。

今現在、私はIS学園に居るわ。ニコラス共の宣言通りね……。

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRはじめますよー」

そして黒板の前でにつこりと微笑む女性副担任……YAMADA
—MAYA……山田真耶先生（先ほど自己紹介をしていた。ちなみに私はこの先生を『GA』あるいは『サンシャイン』と呼ぶことにする。あるいはワンダフルボデイ）。

身長はやや低めで、そこ等の生徒と大して変わらない。しかも服が妙に大きいのもあって本人はますます小さく見える。……妙に服が大きいのは……絶対に妙に胸が大きいからだろう。なんだ……あれは……アサルト・セルか？

あとメガネのサイズもあってない。サイズ選びが下手なんだろう
か。

……。

……………。

っーかね！？ そんなロリ巨乳の先生なんてどうでもいいんですよ！！

問題点はそこじゃねえんだぜ！？

一番の問題点はな、そう！

中央の最前列に！

前にッ！

男が居るんだよッッ！！

……ああ、追記しておけば、ここはIS学園。可愛そうなお友達が沢山いる所だ、君も一度は行ったことがあるだろう？ ……ない

か。

あと可愛そうじゃなくて可愛いか……、あとチャー研再放送おめでどう。

で、話を戻すけど。

ここはIS学園。ISの何たるかを学ぶ場所であり、ISを操縦できない男は入ることは絶対に許されない！

つまり、必然的に女子校と化しているのだっ！

なのに、男がいる。と……。

意味が分からない。

「それでは皆さん、一年間よろしく願いますね」

「……………」

ああ、何か真耶先生が言っていたらしいけど聞いてなかった。よって反応できなかった。

……だって男なんだぜ！？ あ、いや。真耶先生がじゃなくて、

最前列の中央が。

おかしい、これはおかしい……。

とか何とか思いつつぼーっとしていると、自己紹介が始まる。

……来たか……学園生活の今後殆どを決める自己紹介。別名『最速なる審判者（ハリイ・ハリイ・プリーズ・ジャッジメント・ミイ）』

ここでマトモに答えられない奴は根暗としてぼっちとなる……、ひゃあ、恐ろしいぜッ！

とか思いつつ『自己紹介をお願いします』『特に無い』『では、お名前は？』『無い』『ありがとうございますー！』『とかそういうやり取りないかなー』とか思っていると、件の最前列中央の男……そう、OTTOKへと番が回ってきた。

奴は……いったい何者なんだ……。

「じゃあ、次に織斑^{おりむら}くん。お願いしますね」

織斑……だと……？ まさかあの……伝説のN I N J Aウォーリアの生き残りと言われる……。

いや、知らんけど。難しい字書くんだろうなー。

……などと思っているが、一向にMr. 織斑の声は聞こえない。どうやら順番が回ってきたことに気付いていないようだ。

あるいは……死んでいるか……。

「織斑くん……？ 織斑くん。織斑^{いちか}一夏くんっ」

「は、はいっ!？」

一度名前を呼ばれても件の織斑は反応を示さなかったが、数回呼ばれると勢いよく返事を返した。どうやら生きているようだ。

それにしても、何を考えていたんだ……？ いや、エロゲの主人公のようなポジションなんだから考える事は一つか。

クラス全員孕ませるとか、そんなことだろう。きつと。あるいはサボテン。またはラーメン。

というか、一夏^{ちふゆ}って名前なのね。一夏……進化したら千夏^{ちなつ}になるの？ あとそれと千冬^{ちふゆ}とか、千秋^{ちあき}とか、千春^{ちはる}とか……。

イーブイかお前は。

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？ 怒ってるかな？ ゴメンね、ゴメンね！ でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。だからね、ご、ゴメンね？ 自己紹介してくれるかな？ だ、ダメかな？」

無視されたのを機嫌が悪いから、と妙な解釈でもしたのか、真耶先生は若干焦り気味に織斑一夏へとペコペコと頭を下げる。

……今この世は教師が生徒に媚を売る時代と言うが……こういう

ことか……。

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？ 本当ですか？ 本当ですね？ や、約束ですよ。絶対ですよ！」

えーっと、この先生は……社会で生きていけるのだろうか。社会と言う荒波に飲まれてももがけるのだろうか……？

なんて軽く考えてしまうほど我等がまやっち☆は弱弱しいわね。

……まやしい☆？ いや、何か違うな……。何処となく似てるけど。主に胸とか。

なんて考えてると、件のミスター織斑が立ち上がった。

立った！ オリムが立った！

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

……うん。

そんなのは知ってるんだよ！ もっと違うこと紹介しろよ！ 趣味はサボテンの株分けで好物はサボテンです、サボテンの葉っぱを生でかじるのが好きなんです！ とか！

……イグアナ？ いや、イアグナだったっけ……グラエナ……？

「……………」

そして沈黙する教室。……窓の外を見れば一面桜が咲いた美しい光景。夜景とコンクリートしか見たことのない私からすれば物凄く感動的な光景ね。……これが春か……。

春……沈黙する教室……まさに沈黙の春っ。

そして、何か言え！ 織斑一夏！ 何か言ってみろ！

「以上です」

だが、織斑一夏は何も言わない。……つまらない男……。

オリムの意気地なし！ ……大体なんだよオリムって、カリムみたいな名前しやがって！！ ロートレクなの？ オズワルドなの！？ エヘヘヘヘエツ→なの！？ 字幕で『ウフフフフ』て表記されてるのに『エヘヘヘヘヘエツ→』なの！？

……全く関係ないけどACPのgripってイイと思わない？ え？ 知らないから教えろ？ いいか、俺は面倒が嫌いなんだ。……まあいい、面倒だが教えてやる。gripってのは面倒が嫌いなSTEINガーさんの曲よ。面倒だね。うん。

……とまあ、本当に全く関係ない事を面倒ながらも考えていたところ。

「あ、あのー」

真耶先生が若干涙ぐんだ声で織斑一夏に話しかけている。失敗したな、織斑。お前終わったぜ。

織斑一夏も織斑一夏で何か知らんけど「あれ？ ダメッスか？ え、ちよっ。ダメッスか？」みたいな顔してるし。

ダメに決まってるだろー、せめて好きな下着のガラは水玉ですとか……。何だその変態的自己紹介……。

……なんか私もシェミハザっばくなってきたなあ……。はあ、死にたい。

とか何とか考えている間に、件の織斑一夏の背後へと黒のスーツにタイトスカートを着こなした長身の女性が近づいている……。

しかも名簿の縁を下にして高く振り上げている。

……殴るの？ 殴るのか！？ 殴ってしまうのかあーっ！？

「いっ——!?!」

パアンッ!! と轟音。

殴ったああああーっっ!!

そして痛そうだなー。私の頭なら間違いなく細胞が一億は死ぬわね。

「……………」

ぐぐぐ……という擬音が聞こえてきそうなほどゆっくりと織斑一夏は振り向き……背後の人物を確認する。

すらりとした長身、よく鍛えられているが決して過肉厚ではないボディライン。組んだ腕。ちよつと強いワンコ（つまるところの狼）を思わせる吊り目。

げえっ、アルトリウス!?

「げえっ、関羽!?!」

似たようなことを考えてた。いや、アルトリウスがどういった感じが知らないけど。

……そして再び全く関係ないけど、灰色の大狼シフ戦は大いに盛り上がったわ、十八戦目で勝てそうになった時は酸欠で死に掛けたもの。そして、死にそうでアルトリウスの大剣を振ろうとしても思うように触れないシフを見て胸が締め付けられたわ……。一瞬倒していいのかどうか迷ったわ……。大発火で燃やしたけど。

などと思っていると再び『パアンッ!』と轟音。

打った! 二度も打った! オリムは親父に打たれたこともないのに! いや、知らないけど。

ちなみにすごい音だから女子達は軽く引いている。私も引く。スクラップ&スクラップ! 全てをぶち壊す!

何がぶち壊されてるかは一目瞭然！ エロゲ臭い高校に何らかの因果で入学出来たならハーレムが待ってる！ っていうオリムの幻想だっ。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

トーン低めの声。……お、恐ろしい……これがいわゆる『戦慄』ってヤツか……初めて味わったぜ……。

……ワンダフルボディ先生が副担任ってことは、恐らくこの先生がこのクラスの『主担任』なんだろうなあ。いやだなあ、こわいなあ。

しかしまあ、オリムも中々に面白いヤツね、背後から殴ってきた見ず知らずの先生に『げえっ、関羽！？』て、物凄い度胸よ。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

どうやら、あの恐ろしい先生の苗字は織斑と言うらしい……。まさか……姉弟……だとも言うのか……。？ 姉弟だろうなあ、親子ってのは無理あるし。

よし、ならば恐らくあの姉の名前は千夏だろう。うんうん。ソレできっと次女とかに百夏ももかってのが居るんだぜ？ で、三女に十夏とじか。

……サマー家族……ッ！？

長女、千夏。次女、百夏。三女、十夏。長男、一夏。……両親はきつと夏夫と夏美。

ああ、なんて暑い家族なんだろうか……。

きつと苗字は松岡ね。

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

などと昼ドラとかにでもありそうな設定を考えていたところ、先ほどの涙声が嘘のように真耶先生は熱っぽい声と視線を千夏（仮）先生へと送っている。しかもはにかんでるし。

え？ 何？ 有名人？ 外人？ 歌？

「諸君、私が織斑千冬^{ちふゆ}だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は若干十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

千冬だったか……サマー家族崩壊。無念。

……っていうか、私は後二ヶ月で十六歳なのだけど。正確には六月十二日。

まあ、いいか……正式な技術は無いとはいえ、私にはシェミハザ機関に捧げた五年間があるわ。

……そう、厳しい五年間だったわ……、百もの戦艦を近接装備のみで全撃破したり……、五機の量産型ISを同時に相手したり……
……あれ……なんで私はこんな奴らと戦ってるの？ おかし
くね？ シェミハザ機関は何と戦ってるというの？

しかもよく思い出してみれば相手は何なのか聞いたら上手くはぐらかされてるし。

陰謀の香り……陰謀の香りがするわ……。

ちなみに一番キツかったのは中国の蛇腹剣使いの英・風勝^{エイ フォンショウ}だったわね……、まさかISでの戦闘が終わったからって生身での戦闘に入り込むとは……。

通信教育でガンⅡカタと我流剣術……そして空手を習得して無かったら今頃食われてたわ……無論食物的な意味で。

中国は何でも食べるからね。

……食えるといえど某世界で最も美しいグロと呼ばれる彼女ね。

うん。血管住宅。

分からない人は『沙耶の唄』って調べてみて、今すぐに。
とか何とか私が思っていると、急に黄色い声援が響いた。……と
ころで黄衣の王って知ってる？ あ、知らない。そうですか。

「キャ————！ 千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！」

物凄い声援だ！

……え？ 織斑千冬は有名人？ まあ、私は生まれてこの方テレビをビデオ1、ビデオ2、ビデオ3以外で使った事が無いから知らなくて当然か……。

それにシェミハザ機関に置いてあったPCはネット繋がらなかったし。

……おかげ様でデジタルにおける画力は極めて上昇したわ、とりあえずボルゾイ以上には。

ちなみに私の傑作はゲルニカを萌えキャラ化させたもので……やめよう、あまり良い話じゃないわね。

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいですよ！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

きゃいきゃいと動物園のメス猿のごとく騒ぎ立てる女子達を、千冬先生はかなりうつとうしそうな顔で見ている。

弟は男でIS乗れる（のだろう）し、姉は有名人。

どうなっているんだ織斑家！ 意味が分からないぞ織斑家！ 織斑の斑って感じが班って字と似てるぞ織斑家！

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられ

る。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

こういうのって酷いよね。

だって思わず引き気味で硬直してる私まで馬鹿者扱いなんだもの。酷いや。

しかしまあ、何とも凄いヤツだぜ、アレだけの人気を投げ捨てるとは……。

これで喜ぶような奴は恐らくシエミハザレベルの病人だけね。

「きゃあああああっ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躰をして〜！」

シエミハザレベルだった。S5よS5、そのうち喉掻き筆って死ぬんじゃない？ コイツ等。

もうドン引きですよ。ドン引き。

ああ、ヤダヤダ……なんでこんな学校に私は居るんだろう……。

「で？ 挨拶も満足にできんのか、お前は」

そして件の織斑千冬先生は話の流れを一刀両断して（恐らく）弟の織斑一夏へと厳しい視線を送る。

……やっぱあれか、サボテンの話しなかったから……あわわ……。

「いや、千冬姉、俺は——」

はい、パアンツ！ 本日三度目でございます！

どうやら織斑一夏は相当バカなようだ！ 例えば母親が通っている学校の教師だからって『母さん』と呼ぶような奴が何処に居るか

！ 普通苗字十先生だろ！

うんうん、リアルでは学校一回も通ったこと無いから分からないけどね！

でもしかし、数々のエロゲで数多の学校を歩き回ってきた私は恐らく間違っていない！

ちなみに私がプレイしたエロゲで一番ショックを受けたのは最初に『この物語の登場人物は全て十八歳以上です』とかなんとか書いてあったのにプレイして即効で『私は14歳！ 中学2年生』とかいうテキストが流れたことかしらね。

……クリスマスプレゼント？ まりもちゃん？ 知らん。

でも興味持った人は『螺旋回路 クリスマスプレゼント』で調べてみたり『まりもちゃん 頭』で調べてみると幸せになれるかも！
……かも！

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

やっぱり調べないほうがいいわ、絶対にやめたほうがいいわ。うん。

……頭を摩りながら織斑一夏は小さい声で返事を返す。

情けないぞ！ 織斑一夏！ でもがんばれ！ 織斑一夏！

「え……？ 織斑くんって、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、世界で唯一男で『IS』を使えるっていうのも、それが関係して……」

「ああっ、いいなあっ。代わってほしいなあっ」

どうやら先の会話で織斑先生と織斑一夏の関係に気付いたらしい女子生徒は更に騒ぎ立てる。

……いや、織斑なんて苗字そうそう居ないんだから自己紹介の時

点で気付くでしょ……普通……。

あ、でももしかしたら……実は織斑は佐藤並によくいる苗字なのかしら……。

ちなみに私が思うに田中よりも梶山の方が多いわ、多分。

とか思っていると、チャイムが鳴り響く。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で身体に染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

いや待てよ、力行以降の自己紹介は！？　ねえ、私の自己紹介は！？　え、待ってよ！　見た目でハンデあるのに自己紹介できなかつたら確実に私ハブられるじゃないのさ！

……もうやだ。泣きたい。



キングクリムゾンッ！　時間を吹き飛ばすっ！　先輩魔法少女の頭も飛ぶっ！

はっ……一体私は何を！？

という茶番を交えつつ二時間目後の休憩時間。

一時間目と一時間目の休憩時間、そして二時間目はどうしたかって……？

時間ごと吹き飛ばされたわ。南無。ちなみに要約すると一時間目はクソつまらない一般常識の話。一時間目の休憩時間は織斑一夏がジャパニーズサムライガールに連れてかれた。そして二時間目は山田真耶先生が妄想に浸っていたわ。

……Oh、全部表せた。

……さてさて……二時間目の休憩時間……。目標である織斑一夏

へと接近する影は一つも無い。よっしゃ！ チャンス！

別に何するわけじゃないけど何かしたい！ 無性に何かしたい！
もう服を脱ぐのだっていいわ！ なんかやりたい！

……学校って……退屈なところなんだね……ワトソン……。

「へエイ、Mr. オリムラ！ ちょっとお話しませんか？」

「ちよつと、よろしくて？」

「へ？」

……無駄に片言で迫って反応を見ようと思ったが、横からやけに
キレイな日本語を話す金髪ロールが現れたことで失敗に終わった。
なんだよ……この金髪ロール……首から上飛んで死ぬよ……。

「……なんなんですか？ あなた」

金髪ロールがこっちを鬱陶しそうに見てきた。

……え、何？ これ私が悪いの？ いや悪くないね！ よっし
や、この金髪ロールで穴埋めだ！ 織斑一夏を困惑させられなかつ
た分この金髪ロールをイジくるぞ。

異論は認めん。

「……で、織斑一夏。訊いてる？」

さっき金髪をイジくると言ったな。

あれは嘘だ。

「あ、ああ。訊いてるけど……どういう用件だ？」

どういう用件か……。

別に何も無いんだよな……。

「えーっと……アレだアレ、うん……本当に男なの？」

「いや、まあ……」

「じゃあ何でココに居るの？」

「俺自身にもよくわからん……」

「なら網パンと縞パンどっちが好き？」

「無地……って何答えさせてるんだよ！？」

無地好きとは……、純情だな。

「なら残念ね……今日の私はスパッツだわ……」

「訊いてねえよ！？」

「ところで私のスカートの下、見る？ それとも鑑賞する？」

「同じ意味だろそれ！」

「ハイどうぞーッ！ シェミ・アッシュダウン様の水色と白のストライプ、とくにご覧あれえい！」

言葉と同時に私は元から短いIS学園の制服（恐らくデザイナーは普段萌えキャラとか書いてる）のスカートを自分で捲し上げ、中身を露にする。

恥ずかしいかって？

ちげえなあ……パンツを見られるのが恥ずかしいんじゃないんだよ……。

そういう雰囲気恥ずかしいんだよ。

「赤と白じゃねえか！」

「しっかりと見てるじゃねえか！ この変態！」

「そんな至近距離でやられたらどうやっても視界に入るだろうが！？」

「だがしかあし、ココでもう一度スカートを捲りあげるとオッ……

!!」

言葉と同時に再びスカートを捲し上げる。

「黒のショーツに代わった……だと……?」

「やっぱ見てるじゃないの、この変態!」

「だから見えるんだっての!」

……なんだこのコント。

金髪ロールは目を丸くしてるし。若干頬染めてるし。

だけど、私は私で何だかテンション上がってきたわア!!
もう全裸になりたい。

「ちなみにもう一度捲るとノーパンになってるわ」

「やるな!」

……実は二枚履いていたっていうオチなのよ。何で履いてたか?

このネタを誰かにやりたかったからよ。

ちなみに当初の目標は山田先生だった。

さて、この抜群の芸のお陰で織斑一夏と打ち解けることに成功したわ、何を聞こうかしら。とりあえず性癖聞くな。

個人的には無理矢理にやるのが結構好きそう。壁に両手を押し付けて、無理矢理キスしてみたり、そのままの無理矢理な体勢で挿入とか。

それは私の性癖だけだな!

「ちょ、ちょっとお待ちなさい!」

と、ここで。

また金髪ロールが突入してくるわけだわ。

……ええい、自己中め……。

「あなたは一体何なんですか!? いや別にどうでもいいですわ! 黙っていてくだらない!？」

落ち着け金髪ロウル! 日本語がめちゃくちゃだぞ!

でもまあ、コイツを黙らせて織斑一夏と何かを喋ろうとは思わないなあ。うん。

ここは素直に譲ってやるか。展開によっては金髪ロールをイジろう。面白そうだ。

「あなたもあなたですわ! 織斑一夏! このわたくしに話しかけられたというのに無視するなんて……信じられませんわ!」

信じなくても、信じてても、関係ない。これが現実だ。

……いい台詞だ……いつか使いたいわね。

しかしまあ、こんな高飛車女……極めて珍しいと思っているそのあなたッ!!

こういうタイプの女は今この世では珍しくない……、何故ならISが世界最高の兵器となり、軍事バランスを握るこの世に置いては……ISを動かせない男はクズ、いや、それ以下の存在だからだァー……ッ!!

まあ、私は劣等種だからそこまで付けあがれないけど。

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

私も知らない。だが黙っておく。だって黙ってろって言われたし。うん。私いい子。

「わたくしを知らない? このセシリア・オルコットを? イギリス

中薬でグチャグチャに掻き混ぜられた挙句様々な薬品を投与されて……」

「違いますわよッ!!」

……えー? 違うの? こんなエロゲ的展開が起こるような世界なのにい?

そしてエロゲに夢を抱く少年達よ、心しておけ。

暖かいエロゲと同数だけ冷たいエロゲが存在することを——萌え萌えらぶらぶちゅっちなシナリオの裏には必ず鬱シナリオが隠れていることをッッ!!

どんな初心者向けのヌルいエロゲでもCEROランクDのノベルゲーぐらいのグロはあるのを覚悟しておけ……!!

「それよりも織斑一夏っ! あなたっ、本気でおっしゃってますの!?!」

「織斑一夏はどうか知らないけど私は本気だぜ!」

「あなたは黙っていてくださらない!? というか日本語通じてますの!?! 意味理解できてますの!?!」

「できてるので黙りますよっ……」

そんなカリカリしなくてもいいじゃないの……。

「で、織斑一夏、あなた本当の本当に知りませんの!?!」

「おう、知らん」

実を言うと……私もあまり良く知らないっ☆てへぺろっ☆

「……………」

どうやら金髪ロール……セシリアは賢者タイムに突入し、冷静に

なったようね。

熱しやすく冷めやすい……か、いい奴ね。

「信じられない。信じられませんわ。極東の島国というのは、今まで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビがないのかしら……」

「大丈夫よ、織斑一夏！　こんなこと言ってるけどイギリスなんて電気が未だ通ってない村が存在するから！」

「……マジか……？　でも何で知ってるんだ？」

「私の故郷なのよ、そこ」

「マジかよ……」

マジだよ。

「で、代表候補生って？」

……あれ、遂に織斑一夏の反応まで薄くなってきた？

「国家代表 I S 操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことですわ。……あなた、単語から想像したらわかるでしょう」

「そういわれればそうだ」

「なんだ……代表の候補生ってことは……他にも数百人ぐらい居るんじゃない？　だとしたらそうでもないじゃないの。国代表のサッカー選手のがまだ誇れるんじゃない……」

「それもそうだな……」

「そこ！　玉遊びと軍事を一緒にしないでくださらないっ!？」

また黙らせられた、酷いよ。そして玉遊びで。I S だって弾遊びじゃないのさ。

私の場合は棒遊びだけど。……やだ……物凄く卑猥……。

「……そうですわ……、そう！ エリートなのですわ！」

再起動だと……盛り上がってまいりました！

ビシィ（決して某公式ネタキャラの彼女のあだ名ではない）！

と織斑一夏に向けた人差し指が鼻に当たりそうなくらいに近い。

ポーズ取るねえ。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「……馬鹿にしていますの？」

「お前が幸運だって言ったんじゃないか。……なあ？」

「ねー？」

織斑一夏が同意を求めてきた。

凄い！ セシリアのおかげで織斑一夏内で私への友好度がグングン上昇するわ！

やったね！

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。唯一男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はズレですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが」

「ふん、まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなたのような人間に優しくしてあげますわよ」

おおすげえ、やさしい。どっかのチュートリアルが全く無いのに

超難解な鬼畜ロボアクションゲーとは大違いね！

「ISのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「……織斑一夏、こんなヤツに頼ることないわよ。我流で良ければ私が教えたげるわ……こう見えても私、ISが公表されてからずっとISに乗り続けてるの。そう……約五年くらい？」

五年くらい……よね。五年ね、初めて乗ったのが十歳の誕生日だから……、ああ、あと二ヶ月で五年か。

しかし……最初はマジでビビったわね、だって傷口箱^{コレ}なんか放ってるオーラっていうか覇気が恐ろしいんですもの。

今ではもうすっかり慣れたけどね！

「はあ……、どうしてあなたはそこまで易々と見抜けるような嘘を吐きますの？」

「はい？ 今何と？」

え、嘘？ 私なんか嘘言った？ いや、嘘ばっか言ってた気がするけど……。

「ですから！ 何故そこまで分かり易い嘘を吐くのかと聞いていますの！」

「……どの嘘？ 嘘ばかりで分からないわ」
「操縦暦の話ですわよ！」

ハイ。

……はい？ 私の操縦暦が嘘……だと……？
何言ってんだこのアマ。

「……何を根拠に嘘だと？」

「根拠も何もありませんわ。……まあ、言うならば五年間もISを操縦しているなら入試試験で教官に勝利するのが普通ではなくて？ 普通ですわよね。それなのに？ 教官を倒した受験者は、唯一！ 私だけ。コレで十分かしら？」

こいつ……っ、論破厨かっ……！ くそっ、油断した！
しかし……。

あー……。

あーあー……。

可愛そうなセシリア。今から大恥掻くことになっちゃうぞー。
可愛そうに、可愛そうに！

「はあい、はいはいはい……なるほどねえ、んまあ、私は教官倒してないわよ。だって、今更私の腕前なんて見せる必要がないもの」

「……は？」

「つーまり……私はですねえ……、筆記試験しかやらずに入学してるんですねえ！」

「ハアア！？ な、……それこそ嘘ですわ！ ありえませんか！」

「だが、在り得る……。私の戦闘を人工衛星の長距離録画で録画したものを予め送っておいたのよ」

ちなみに戦闘内容は日本の代表的な量産型IS『打鉄』三体と現在トライアル中のIS『ミナーヴァ』との乱戦よ。

ミナーヴァはやばかったわ……装甲は紙だったけど、機動力、エネルギー効率……そして、それに加えて超高度演算による未来予知が厄介だったわ……。

もうほんとに、アレの時は死ぬかと思った。人食い英風勝の時並

に焦った。

「し、信じませんわよ！ 絶対に！」

「信じなくても、信じて、関係ない。これが現実だ」

ワリと早くこの台詞使えた！ やったねシェミちゃん！

「な、な、なっ——！！」

「ところで話の腰を折ってしまつて悪いんだが、入試つて、あれか？ ISを動かして戦うつてやつ？」

「っっ！！ ……そ、それ以外に入試などありませんわ」

え？ 筆記試験なかった？

あ。

その程度、入試にも含まれないと。そうですか、そうですか。というか、織斑一夏、ナイスタイミングだぜ……。

「あれ？ 俺も倒したぞ、教官」

「は……？」

「す、すげー！ 織斑さんマジパネエッス！ 残念だったな、セシライ！」

「セシリアですわよ！ 何ですの！？ セシライって！ ……それよりも、わ、わたくしただだと聞いてましたが？」

セシリアもセシライも変わらないじゃないですか……。

ローマ字に直してもSESIRIAとSESIRAI。

ほらIとAの位置が入れ替わっただけじゃないの。

「女子ではってオチじゃないのか？」

ビシイ（決して妄想癖がヤバい某ゲームの血まみれヒロインを指す言葉ではない）という音が聞こえた。

あ、これはキタわね。

「つ、つまり、わたくしだけではないと……？」

「いや、知らないけど」

「あなた！ あなたも教官を倒したって言うの！？」

「おーい、セシリア。口調崩れてるわよー！」

「だまらっしゃい！ で、どうなんですよ！？」

あ、直した。

「うん、まあ。たぶん」

「たぶん！？ たぶんってどういう意味かしら！？」

物凄い剣幕で迫るセシリア。お、おおう。ああん凄うい……。
というか。

フルパワーだぜ、信じらんねえ！！

「えーと、落ち着けよ。な？」

「こ、これが落ち着いていられ――」

キンコンカンコン、と。

まるで狙ったかのように。セシリアを撃墜するかのように美しい
タイミングで三時限目開始のチャイムが鳴り響く。

今の私にはエヴァンゲリウムに聞こえる。ちなみにこれは現実の
話。英語で言えばリアル話。

「っ……！ またあとで来ますわ！ 逃げないことね！ よくって
！？」

言うだけ言ってセシリアはさっさと帰っていく。私も席に着くか……。

「まあ、次も来るけど、構わないわよね？」

「おう、大歓迎だ」

……ファーストコンタクトはセシリアを生贄に捧げることで素晴らしい物になったわ……！！

ありがとうセシリア。私、あんたのこと……嫌いじゃなかったよ。

四式 クラス代表といえは（前書き）

100M走の選手ですよ。まったく……。
※大幅に改編しました。

四式 クラス代表といえば

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

一、二時間目を終え、三時間目。

今回の授業内容も先と同じく、私が五年前に通った地点の内容。

いやいやあ……私の脳が普通なら復習大歓迎なのだけど、忘れな
いしなあ……。

つーかね、正直言ってこれ拷問よ。

私はご存知の通りアルビノでしょう？ だから最近までは午後七時に起きて午前十時に寝る生活ばっかだった（日本に来てからはなるべく直そうとしてるけど）から、この時間帯はひじょーに眠い。

でも寝たらアレじゃない？ なんか、殺されそうじゃない？ 主に織斑先生とか織斑先生とか織斑先生とかに。

頭グシャアてされそうだもの。うん。

あ、織斑先生と言えば、今何か教卓に立ってるわね。山田先生ノ
ート手に持ってるし。……そこまで重要かね、各種装備の特性。

……。

え？ 時差？ いやいや、違うのよ。ほら、時差があっても月見ると眠くなるじゃない？ それと一緒よ。日光浴びると眠くなるの。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

……と、思っていたが。

ふと思いついたように織斑先生が言う。

クラス対抗戦……代表者……ああ、あれか。100m走の選拔メンバーとかね。なるほど。

私は一応こんなナリでも（自分でもかなり不思議だが）体力と瞬発力は結構あるわ。

こんなナリなのね。骨若干浮き出てるのにね。人体って不思議！
ファンタスティック！

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点で大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ざわざわと教室が色めき立つ。

……そりゃざわめき立つわ……、なんで100m走の選手やるだけじゃなくて学級委員みたいなことやるの？ おかしくね？ え？ それ足の速さで決めるトコなの？

……日本ってえのは奥が深えぜ……。

リレーだけなら立候補して目立とうかと思ったけど、私は面倒は嫌いなんだ。

絶対になりたくない。うん。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

おお、やっぱり、っていうか絶対推薦されと思ったわ。うん。まあ、足速そうよね。結構鍛えてる感があるもの。

「私もそれが良いと思います！」

更に推薦。織斑一夏押すなあ、このクラス。

まあ、織斑一夏ってなんか陸上部とか入ってたような感じだし、大丈夫でしょ。

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

他薦はともかく自薦で……セシリア・ウォルコット以外しなさそうじゃない……。あれ、セシリア・オルコットだったかしら？ っていうか発音の問題よね、つまりどっちでも正解。わぁ、私って天才！

他の奴等とは目の付けどころが違うぜ……。

「お、俺！？」

と、いきなり立ち上がった織斑一夏。

え、今まで違うと思ってたの？ 織斑って言われてる上に『くん』付けされてるんだからお前以外ありえないだろ。バカなの？ この人実はバカなの？ やばい、もしかしたらコイツよりセシリアさんがマシかもしれない。

っていうか、セシリアさんは真っ先に自薦しそうなのにしらないのね。

……やっぱり、あんなにデカイ胸部スタビライザー付けてたら走れないか……。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？ いらないなら無投票当選だぞ」

「ちよっ、ちよっと待った！ 俺はそんなのやらな——」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

「い、いやでも——」

諦めの悪い男だぜ、まったく。

と、織斑一夏が未だに続く織斑反論を、突然甲高い声が遮った。

「待ってください！ 納得がいきませんわ！」

パンツと机を叩いて立ち上がったのは、我等期待の星、セシライ・ウォールケンさん！

……ん！？ 間違ったかなあ……。

っていうか自薦した！ やめろセシライさん！ その胸部スタビライザーは某貴族の羽根型スタビライザー並に機体負荷が高いぞ！
！ そんなの付けて走るなんて自殺行為だ！

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

あ、セシリア・オルコットか……でもウォールケンはまだしも、セシライはSE S I R I AとSE S I R A I……IとAが入れ替わっただけだから別に大丈夫よね。

……これ、さっきの休み時間にも言ったような気が……。気のせい
いか。

「實力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

ええ！？ セシリアさんは……速いのか、足……。嘘でしょ……。
というか、そのプロポーションで100m全力疾走って……確か、IS学園は未だにブルマを使用してただろうし……。

あ、サーカスじゃなくて、そういう……こう、好きな人には溜ま

らんモノをやるつもりでらっしやるのね。
セシリアはエロいなあ。

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

「いや、さすがにそれはない……私のが上だと思うわ」

あんたより私のが有利よ。胸的な意味で。

……て、しまったアアアアアア！！

思わずセシリアの意味不明な自信にツツコンでしまったアアアア！！

だって、仕方ないやん。そんな胸部スタビライザー付けて走れるワケがないんだもの。

「んなっ！？ ……またあなたですの？ あなた、少々自信過剰ではなくて？」

「いやいや、それは無いぜ。なんせ私は自己最高タイム9秒61だぜ？」

聞いたか私の自慢の最高タイム！ ウサイン・ボルトも真っ青だぜ！

やっぱISとか止めて陸上とかに出ようかしら。そっちのが活躍できる気がする。うん。

周囲の生徒達も目を丸くして此方を見ている。そうだろうそうだろう、速いだろう速いだろう。

……ていうか、私の歩幅でこの速さ。足が更に長くなればボルト抜けるんじゃない？

いや、そこまで身長高くなりたくないけど。……何故って？ 上目づかいができなくなるじゃないのさ。

上目づかいは重要よ。これがあるとないでは大きな差が出るわ。

……何にかって？ そんなの……媚を売るため？
などと思っていればセシリアが此方を呆れたような目で見てくる。

「……は？ 秒？ ……あなた、何の話をしてますの？」
「んえ？」

え、100m走の話だけど。
何か間違った？
そして回りの沈黙。
ん！？ 間違ったかな……。

「……あれ！？ 織斑先生！ 今100m走の代表選手の話よね！」
「？」

「国に帰れ」
「あれえ！？」

帰れて。イヤよ、またあの二人の操縦するジェット機に乗るなんて。

あー……そういえばユデイトと天名は元気かしら……自爆テロとかやってなきやいいけど。

じゃない、そんなのどうでもいい。っていうか、あの二人はさっさと死んだほうが世のためだと思う。真摯に思う。

で、結局何の話なの？ え？ っていうか、今のが教師の言葉？
訴えますヨ？

「えーっと、アッシュダウンさん？ 今、クラス代表の話だよ？」
「ええ、知ってるわよ。クラス対抗戦のクラス代表でしょ？」

何を今更なこと言ってるんだコイツは。
アレか、私が日本語わからない人とも思われてるのか。

ナめんなよ！ 伊達にシエミハザやってないんだからさ……、年季が違うわ。

「私、知ってるのよ？ 日本でクラス対抗戦と言えば100m走だつてコトぐらい……」

「あー……アッシュダウンさん……」

女子生徒が救いようのない奴を見るような目でこっちを見てきた。どうしてそんな目で私を見るんだい、お嬢さん？

「馬鹿者が……」

さらに織斑千冬先生が此方を愚者でも見るかのような目で見てくる。

……どうして、そんな目ができるんだ……。

「え……だって、少なくともニコラスが読ませてくれた公に出来る漫画には……」

「大馬鹿者が、ここはIS学園だぞ。クラス対抗戦といえばISを使用した模擬戦闘に決まってるだろ」

ああ、あー。

クラス対抗戦って……IS使った対抗戦か……。

やっちまった。

そう思ったときには既に時遅し、周囲からクスクスという笑い声が聞こえてくる。

……終わった、私の運命は破滅……。羞恥で顔が熱くなるのが分かる。

軽く泣きそうなんだけど。……自信満々にボルトがどうこう言うてたあの頃の私の首をへし折ってやりたい……!!

そうか……なるほど、それならセシリアさんが自薦するのも中々に理解できるわ。

私が出る幕ではないか……。

……いや待てよ？ IS？

ISといえば私がポーカーの次に得意とする分野じゃないの。うん。

……よしよしよし、挽回できるぞシエミー。あの生意気なイギリス少女といい勝負して勝利して、最後に『いい試合だったわ』って言いながら手を差し伸べれば……行ける、行けるぞ私！ この方法ならクラスメートからの評判を持ちなおせる！

「だ、だがっ、そうだとしても！ 私の方が上よ！」

「はあ……、では、話にならないと思いはしますが、一応お聞きしますわね。ISの稼働時間は？」

ええい、そんなのどうでもいいんだよ、なんか意味不明なところでぶち切れて勝負挑んで来なさいよ！ 『決闘ですわ！』とか言いながら!!

……ちなみにIS……特に専用機は、搭乗者に合わせて自己進化を繰り返し、より搭乗者に合った形になる。よって、共に過ごした稼働時間が物を言うわ。

それと兵器と思わず、パートナーと思え……とも、言われた気がする。私にとっては麻薬に近いけど。

もう、傷口箱が無いと気が狂いそうになるもの。

とか考えてると、セシリアが此方をイヤな笑みを浮かべつつ見ている。

……恐らく『どうせ答えられないのでしょうか？ 欠陥品の分際で……調子に乗らないで欲しいですわね』とか考えてるのだろう。

今の精神状況でそんなことを言われたら泣く自信がある……確実に泣く……。

ただでさえ慣れない『学校』という雰囲気でテンパってるっていうのに……。

ええい、仕方ない。単純な計算でいいか。

「えーっと、大体4380時間ぐらい？ 単純計算だからもうちょつと少ないかもしれないわ」

「は、はあ？」

「……大丈夫よね、合ってるわよね？ コレ貰ったのが十歳の時でしょ？ それからほぼ毎日乗り回してるから……うん、合ってるわ」

素直に言ってみたところ、周りから多数の疑惑の視線と、少数の嘲笑を込めた視線を向けられる。

やめて……ほんとやめて……見ないで。

思わず黙り込んで座りそうになる気持ちを抑え、強がる。

「……む、信じてないわね……あんた等……よっしいいわ、私をクラス対抗戦に出してみなさい。全員同時に相手しても勝てる自信があるわ。……あ、織斑先生。私自薦するわ。うん」

右手を上げつつ織斑先生に言ってみれば背後のボードに書かれた『セシリア・オルコット』の横に『シエミー・アッシュダウン』と書かれる。

そして、セシリアが信じられないような目で織斑先生を見てる。

……絶対コイツ私をサイコパスか何かと勘違いしてるわね。人は信じろ、まったく。

そして更に、沈黙。

それは騒いでいたセシリアが私のせいで黙り込んでしまったから来たもの。

え、何この私が悪いみたいな雰囲気。それとこっち見るな、周囲の生徒。

……もうほんと……私を見ないでよ、ほんと……いや、目立たせたの私だけどさ……。

慣れてないのよ、大勢の人に見られるの……。

「……あー、どうぞ。まだ文句言い続けるんでしょ？」

その雰囲気になんて耐え切れず、思わずセシリアに振る。
声が若干涙ぐんでたけどバレてないことを祈る。

「……そう、そうですわ！ 大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――」

熱しやすい人で助かった。そしてバレてなくてよかった。

どうにか先ほどの勢いを思い出すだけでフルパワーになれたらしいセシリアが大げさなポーズと共にそんなこと言ってる――

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

――どうやらこっちの人は熱しやすく冷めにくい人だったよう
で。

「なっ……！？」

口が滑ったのかどうかは知らないけど、織斑一夏が発した言葉でセシリアは怒髪天をつくと言わんばかりに顔を真っ赤にして怒りを

しめてしている。

「あっ、あっ、あなたねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

まあ、確かに何にもないのよね。料理も不味いし。

……といってもまあ、シェミハザ機関の食事は和食中心だったから、あまり食べたことないんだけど。

「あなたは黙っていてくだらない！？」

ひい！？ 読心された！？

そして此方を見てくる複数の生徒達、飛び火した……最悪だ……ガソリンに引火したよ……。

「何も言っていない、何も言っていないから……」

顔を横に振りつつ両手を胸のまえに添えて全身で否定する。

こわい。学校ってとてもこわい……。

……というか、セシリアさんも随分とアレな人よね。自分だって織斑一夏の祖国を侮辱しといて。

あーあーやだやだ……これだから三次元の女は……。
……………。

なんか、物凄くシェミハザ臭いことを思ってしまった。……気のせい気のせい、それに私だってシェミハザ機関。シェミハザ臭くたって問題なし。

「それよりも織斑一夏ッ！ 決闘ですわ！」

バンツと机を叩くセシリア。……私の計画だと私が決闘申し込まれるはずだったのになあ……。忘れないで、お願いだから。白くて

影薄いの自覚してるけどさ。

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い——いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そう？ 何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの实力を示すまたとない機会ですわね！」

完全に出遅れた。

もう割り込めない……ハハハ……。

情けないけど……どうやら私の心は折れる運命にあるようね……。

三年間ずっとひとりぼっち、か……。

いいね……いい学園生活だよ……。

「ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いや、俺がどのくらいハンデつけたらいいのかなーと」

……と、そこで。織斑一夏さんがまた意味不明な発言をしたわけです。

ドツと爆笑が巻き起こる。

こいつ、本当にバカなんじゃないかと。そろそろ本気で思ってたぞ、織斑一夏。頑張れ織斑一夏。負けてもいいけど足掻け。骨位は拾ってやる。

……まあ、私には関係のないことなんですけどね。

ああーあ……今日から早速人気のない所を探さないといけないわね……、便所飯はイヤだしなあ。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「織斑くんは、それは確かに使えるかもしれないけど、それは言い過ぎよ」

しかしみんな笑いすぎだぜ、意外と日本ってSな人が多いの？

……え、私？ 笑えるワケないじゃない……。

むしろ笑え、笑えよ。

あ、ちなみに補足すると今現在この世では男女で戦争が起これば三日で女が勝つらしいわよ。すごいね。

「……じゃあ、ハンデはいい」

「ええ、そうでしょうそうですね。むしろ、わたくしがハンデを付けなくていいのか迷うくらいですわ。ふふっ、男が女より強いだなんて、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

先ほどまでの激昂は何処へ、セシリアは明らかな嘲笑をその顔に浮かべている。

やっぱり、熱しやすく冷めやすいわね、この人。

なんとも生きやすそうな性格ね、羨ましいよ。

……私？ 私は普段は物凄く熱しやすいいけど一度冷めると全然熱されないわよ。

ほら、今の私を見ればわかるでしょ？ 笑っていいのよ？

「ねー、織斑くん。今からでも遅くないよ？ セシリアに言って、ハンデ付けてもらったら？」

織斑一夏から見てちょうど斜め後ろの女子が気さくに話しかけている。けれど、その表情は苦笑と失笑の混じったもので、それに織斑一夏が気を悪くしたことは表情からも簡単に読み取れる。

……いいじゃねえか、話し掛けてもらえるだけ。私をってみろよ？
みんな目線合わせないぜ？

ハッハッハ。

シェミちん初日で大失敗☆てへっ！

……これだから学校には来たくなかったんだ……。

「男が一度言い出したことを覆せるか。ハンデはなくていい」

「えー？ それは代表候補生を舐めすぎだよ。それとも、知らないの？」

「……………」

結局割り込めずに話が終わった。私の学校生活も終わった。

ふふふ、やっぱり私にはイギリスの地の監獄がお似合いみたいね。

そこで私と同じコミュ障のヤツと一緒にエロゲだとか同人誌だとか二次元の世界に逃げ続けるのが一番なのだわ。

「さて、話はまとまったな。それでは織斑とオルコットの勝負は一週間後の月曜。そして勝ち残った者とアッシュダウンの勝負は二日後の水曜。それぞれどちらも放課後に第三アリーナで行う。各自でそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

……お？

なんか私が決闘に織り込まれてるぞ？ ……おお！？

「なっ！？ 織斑先生、今……何と仰いました！？」

「人の話はよく聞け、オルコット……。授業を始めると言ったんだ」

焦り気味にセシリア・オルコットが織斑先生へと問い詰めている。
それは焦るわよね。私だって今若干焦ってる。

「い、いえ……そこではなく……」

「じゃあなんだ？ ……なんだ。アッシュダウンにシードを与えたのが不満か？ ……安心しろ、コイツの実力は私が保障してやる」

織斑千冬先生が私を見つつそんなことを言う。

再びクラス中の生徒の視線が私の身体を射抜く。

「え……？ いや、ちょ……」

私は思わず半歩下がる。

がん、と背中に衝撃……後ろ？ 振り向かないよ？ だってどうせ私をじいっと無表情で見つめる生徒がいるだけなんだから。そんなホラーは体験したくない。

「どうした？ ……なあに、安心しろ。この私が保障してやってるんだ、お前ならいい勝負ができるさ。だろう？」

更に織斑千冬先生が私へとプレッシャーを掛けてくる。

故意か意図せずか……それは分からない。いや、たぶん故意。

だろう？ じゃないです、先生……。死んでしまいます。心が死ぬよ。

「だがまあ……、どうしても嫌だと言うなら自薦を取り消してやつてもいいんだぞ？」

「あっ、いや、あ……やります！ いやむしろやらせてください！」

私の名前を消そうとする織斑千冬先生に対し、気付けばそんなことを口走っていた。

……口走れてよかった。ここで何も言えずに自薦を消されたりすれば完全に挽回のチャンスを無くしていたわ……。



「此方チームα、カメラの設置作業を行っている。支援を寄越してくれ」

放課後、私は第三アリーナで独り言を呟きつつアリーナ各地にカメラを設置していた。

理由は単純。来週月曜に行われる織斑一夏vsセシリア・オルコットの戦闘を録画し、セシリアの動きを完璧に記憶するため。

織斑一夏については考えなくて大丈夫だろう。何せ専用機持ちじゃないし。……まあ、恐らく専用機はデータ回収のために送られて来るだろうけど、あの様子じゃ到底実力差はひっくり返せないわね。……セシリア・オルコットがゴミのように弱いただの高飛車女だった場合は分からないけど……、期待しときましょう。お貴族様のワルツがなるべく綺麗なのを。

「……何をしている？」

「あ、ちーちゃん」

バシンッ！ と。

私の柔らかい頭はスパナで思いっきり打ん殴られたぐらいの衝撃を受けた。

……私が何をしたっていうんだ……。

誰に叩かれたか？

そりゃあ、もちろん。

織斑千冬大先生ですよ。

「目上の者には敬意を払え、馬鹿者」

「サーセン」

再びバシ——食らうかぁッ！

私は即座に側転して回避する。

「ちよろいっつ！」

「そうか」

勝ち誇ろうとした瞬間。私の額を目掛けて出席名簿が飛んでくる。

「分離飛行だど！？ あんなものを浮か——いぎいっ！？」

亜音速に達しそうな勢いで出席簿が私の額へと突っ込んでくる。

……死んじやう。

「まだやるか？」

「も、もういいです……」

「そうか」

許してもらえた、……助かった、正直言って本気で痛いわ。

今までシェミハザ機関の過保護の元でぬくぬくと育った私からすれば痛みというのはとても恐ろしいものなワケで……。

次があったらショック死してた、たぶん。

「で、何をしてるんだ？」

「セシリア・オルコットとか織斑一夏とかの動きを観察するためのカメラ取りつけですよ」

「ほう……？ あいつら程度、お前の敵ではなさそうだがな」

「……まあ、そうかもしれないませんが……ほら、先生が随分と私に期待されてるようなので。応えないとなーと思って」

次に設置するカメラの設定をしつつ適当な言い訳をする。

……本当は怖いよ、策も無しに挑むのが。私ってほら、結構弱気だから。

ソレに対して織斑先生は「ほう」と呟く。

……あ、しまった。

別の作業を行いつ質問に応えるのは……万死に値する！ ……のかしら。

恐る恐る織斑先生の方角を向く。

すれば織斑先生はニヤついた表情でこちらを見てた。

……うん、大丈夫……だと思う。たぶん……。

「どうやらお前を勘違いしていたよ」

「え？」

「機関の奴らの話やら何やらを聞いた限りじゃ、自分の力量を勘違いしている小生意気なガキかとおもったが……なんだ、意外と可愛いじゃないか」

『可愛い』……ねえ。

もうシェミハザの奴らに散々言われたから聞き飽きた……と思っていたけど、何。結構言われると嬉しいわね。

それと結構恥かしい。

「か、可愛いって……」

「ああ、お前は可愛いぞ。そら、手伝ってやる」

そんなこと言いつつ織斑先生は私が設定し終えたカメラを持って仕掛ける予定を書き記した図を一瞥し、そのまま指定された場所へと向かって行く。

……なんか妙に優しくない？

自分からクラス中の声援をぶった切ったような人なのに……、正

直言って若干怖い。

何か裏があるんじゃないか。なんても思ってしまう。

「……シェミハザの奴らから何か聞いたんですか？」

思わず聞いていた。

織斑先生を信じたい。だけど、さすがに不審なほど優しすぎる。うっすらと気味悪さすら覚える。

だから、聞いてみる。

信じるために、安心するために。

「別に何もないさ。お前の基礎的なデータだけだ」

「……と、いますと？」

「露出趣味、ゴシックローリータ系統の服装を好む、男性経験なし、異性との交際経験もなし、交友関係もなし、最近の悩みは骨が浮き出してきたこと、左利き、性感帯はうなじから背骨に沿ったライン、スリーサイズは……」

「ふあっ!？ い、いいです言わなくて!!」

スリーサイズ!？ どうやって調べたんだ、シェミハザ!

……あ、ネイサンか。

「そうか？ まだまだあるぞ、羞恥心はワリと人一倍ある、混乱すると動けなくなるタイプ、ホラーが苦手、パニック映画も苦手、ジェットコースター類も苦」

「やめてください! 本当に! もうお願いします!」

「残念だ」

何を話してるんだ……シェミハザの奴ら……。

とか何とか思いつつ、それ以降もまったくやめずに私の恥かしい所を次々と上げていく織斑千冬に参りながらもカメラを一生懸命配置したのは言うまでもない……。

四式 クラス代表といえば（後書き）

お待たせして申し訳ありませんでした、次は早く投稿……できるはず！

五式 学食（前書き）

遅れました。そして内容がないよう。

五式 学食

「ここが私の部屋か……」

カメラ設置（そして織斑先生との千年戦争）を終えた私はIS学園に付属する寮——ちなみにIS学園は寮制だ——へと来ている。

何故かって？

寝るんです。眠いから。

夕飯とかいりません。

眠いんです。それに何か、今何食べても美味しくならなそうだし。

……また骨が浮き出るよ、やったねシェミちゃん。

あはは、うれしいな。

……たはは。

「はい。今日からルームメイトのシェミちゃんです。よろしくー」

などと言いつつ部屋に入ってみる。

部屋に入ってまず最初に目に付くのはベット。二つならぶベット。

……すげえ、あれが本物のベットか……私のパイプベットとは大違いだぜ……。

そして、それよりも注目すべき点は部屋の中が見事に無人だということ。

……ええー？

何で誰もいないのー？ ひとりぼっちはさみしいんだよ……。

まあ、概ね違う部屋に行ってるんでしょうね。織斑一夏の部屋とか織斑一夏の部屋とか織斑一夏の部屋とか、まったくもう大人気だなあ！ リア充死ねばいいのに！！

……まあ別にいいか、それよりも……今度は失敗しないぞ、絶対に成功させてみせる……ルームメイトと険悪な雰囲気でも作ったら死ぬしかない。

とか思いつつベットにダイブ。

着地と共に柔らかい、全てを包み込んでくれるかのような感触。

……ああ、これが本当のベットか……パイプベットの上にマットを敷いただけのモノに寝続けた私には優しすぎる……。

……………。

……。

……っ！？　今確実に寝てた、寝てたわよ！

駄目よ、シェミィー！　今度は失敗しないって決めたじゃないの！
寝てどうする？！

……………。

………あーでも、眠いし……なんか……別にいいか。

来た時に起こしてくれるでしょ………たぶん……。

『って、本気で殺す気か！　今のかわさなかったら死んでるぞ！』

……………隣の部屋騒がしいし……どうせ織斑一夏……面倒なヤツだ。

……ねむい。



……。

ゆっくりと目を開ける。

非常にゆうっくりと。

悟られないように、悟られないように……。

何故か？　聞きたい？

今、部屋に誰かが入ってきたのよ、……まあ、恐らくはルームメ

イトなんだけど……。

入ってきた瞬間にね、ソイツね。こう言ったのよ。

『なんだ？ もう寝てるのか』

ってね。

それだけだったまだいいのよ。……でもね、物凄く何処かで聞いたことがあるような声なの。

何処かっていうか、IS学園でなんだけど。

ゆっくりと、ゆっくりと目を開けて、入ってきた人物を確認する。

「……………ひいっ!？」

「ん？ 起こしたか、寝てろ」

そこには――。

黒いスーツが非常に似合う長身の女性――。

織斑先生が居た。

この部屋に唯一存在する椅子に堂々と座りつつコーヒーを飲んでらっしゃる。

……おかしくね？ え、おかしくね？？ なんで私教師と同じ部屋なの？

「な、なんで……」

「私は一年の寮長だぞ？ 寮長室に居て何が悪い」

「は、はぁ……？ ここは1026号室じゃ……」

思わず枕元に置いたキーを確認する。

……うん、キーに括り付けられたタブには1026号室と書いてある。

それに部屋のドアに掛けてあったプレートにも1026号室と書

いてあったは——。

…………。

よくよく考えたら何で他の部屋はドアに直接書いてあったのに、この部屋だけプレートが掛けてあったんだ？

うん？

…………。

「まさかあつ…………！！」

音速が如き速度で部屋から飛び出し、扉に立てかけて合ったプレート
の『裏』を確認する。

一文字目。寮。

二文字目。長。

三文字目。室。

続けて読むと？

寮長室……………！？

「バカな…………」

「馬鹿も何もない。お前は私と同室だ」

いつの間にか背後に回った織斑先生が私の肩に手を置きながら呟く。

…………こんなのでアリかよ…………。

「まあ、なんだ。一年間頼むぞ」

「う、嘘だアア——」

バシインツ、と。

叫ぼうとした直後に何処からか取り出した出席簿で頭を打ん殴られた。

死ぬ。

「痛いっ……痛い！ やめて！ ぼ、暴力反対！ い、痛いイツ！」

しかも織斑先生は陰湿なコトに端の一番固い所でコツコツと短く連続で叩いてくる。

痛さは先程の一撃に比べればそれほどでもないが、普通の人がある二倍は痛い……と思う。

「ハッハッハッハッハ」

「ハッハッハッハッハじゃないわよ！ 遊んでるでしょ！？ 遊んでるわよね！？ 確実に遊んでるわよね！！ 酔ってるの！？」

バシイン、と。頭脳に衝撃。

……なんでまた殴るの……？ 酷いよ……。

「年上の者には敬語を使わんか大馬鹿者」

「……………はい」

り、理不尽だ……。

「それと私は素面だぞ」

「……………はい」

これで素面とか死ぬる。こいつはシラフでもジラフでもなくセラフだ。絶対そうだ。

「こんなにも優しい先生が一年間一緒に居てやるんだ、ありがたく思え」

「……………」

「返事は？」

「……はい」

冗談じゃない……。



……ということが昨日あった私から質問よ。

人を一番傷つけられる行為って何か知ってる？

無視、よ。

……。

私は今、実際にそれを痛いほど感じてるわ。

朝食？ 誰も来ない端の席でコッソリと食べたわよ。

……もうやだこれ……どうしよう。

昨日のルームメイトが織斑先生というありがたいような終わってしまったような出来事から半日ほど。

四時限目が今丁度終わったんだけど。

もう死ぬ。心が死ぬよ。

だってもう、触れられもしないんだぜ？

いやんなっちゃうよ。……いや、自分が蒔いた種だけだね。

だって、あのセシリアですら来ないんだぜ？ もう終わってるよ、

これ終わっちゃったよ。

人っ子一人寄り付かない。

………。

仕方ない、学食に行こう……とりあえず何かは食べよう。これ以上食べなかったら栄養失調で死にそうだし。

そう思っただけ席を立ったと同時に。

——織斑一夏が宙を舞った——。

……なんで飛んでるのあれ？ PICでも搭載したの？ それともあれか、二文字で一文字目がEで最後の文字がTのアレか。

自転車乗ってないしバックに月ないけど……。

しかもそんな意味不明な状況でも周囲に女子がいる。

……ええー？ なにこれえー……。

と、思った直後。織斑一夏は背中から床に叩きつけられる。

あー、ジャパニーズJUDOか。じゅーどーね、あれ。

……全然柔らかくない！ 殺意の鋭角がバンバン突き出てる！！
まるで殺意の正十八角形だ！

正十八角形に鋭角ないけどね。

「え、えーと……」

「私たちやっぱり……」

「え、遠慮しておくね……」

そしてさすがに周囲の女子達も引いた。いや、それは引くわ……。いきなりロングポニーテールのジャパニーズサムライガールに投げ飛ばされる男にはさすがに引かないヤツなんていないわよ……。

っていうか、あのロングポニテのジャパニーズサムガルは何なのかしら。知り合い？ 幼馴染？ 歌？ ほら、こんなもん。

それよりもあのロンポ邪魔じゃないのかしら……、本当にジャサムガなら剣道とかやってるんでしょう？ 絶対切り落としたほうがいいわね。

……刀Ⅱロングヘアー？ あのね、知ってる？ 髪にも重さはあるのよ？ 伸ばしてたら動きにくいわよ。

髪が邪魔になる一番の理由は『重さ』なのよ。

……まあ、持論だけどね。

なんとかかんとか考えつつ織斑一夏の横を素通りすることにした。女子達に囲まれてない今、あいつの隣を通ればすんなりと進めるはず。

……まったく、教室の出入り口に女子固めるんじゃないっての……。

「箒^{ほうき}」

「な、名前で呼ぶなと——」

「飯食いに行くぞ」

私が織斑一夏の横を通り過ぎる三十秒前、サーガ……箒（おそらく織斑一夏の旧友か幼馴染）？ の腕が織斑一夏にがっしりと掴まれた。

おお……強引……。

というか箒って……、掃除用具？

「お、おいっ。いい加減に——」

「黙ってついてこい」

「む……」

私が織斑一夏の横を通り過ぎる五秒前、織斑一夏はにべもなくそう言い、学食へと向かおうとする。

むっ……やめろ、せめて私が通り過ぎるまで起動するんじゃない、ワンサマ。……王様^{オン}？

などと考えつつ前進。通り過ぎるまで三秒……二秒……一秒……通過。

これで地球は救われた……。

そう思いつつ通り過ぎた瞬間。私の右手が誰かにぐっと握られた。思わず振り返ってみれば、織斑一夏が私の顔をじっと見ていた。え、何なのこの人……？

怖いんだけど。投げられる？ 柔道で投げられるのか？

脱臼しちゃう。絶対脱臼する。……痛いのはイヤだなあ……でも抵抗して怒らせると怖いしなあ……。

というか、腕を掴まれてみてわかったけど……、なんていうか、男と女じゃ手の掴み方すら違うのね。

更に言えば怖い。怖いぞ、織斑一夏。無表情でこっち見ながら手を掴まないで。

怖い。ものすごく怖い。

なんていうか、眼力がある。……あの姉あってこの弟か。

「……なんでお前泣いてるんだ……？」

ふと硬かった表情を崩した織斑一夏はそんなことを私に向かって言ってきた。

泣く……？ ハッ……何を馬鹿な……。

私の涙はとっくに枯れ果てたさ……地獄に落ちたときにな……。

じゃないっ！ え！？ 泣いてる！？ 私が！？

ものすごく久しぶりな気がする。朝起きて目を開けた瞬間にボルゾイのフェイスという名の最終兵器が初めて写りこんだとき以来かしら……？

……正直言って、あれは精神ブラクラレベル。気がおかしくなる。直視しちゃいけないものだ。

「な、ななっ！？ な、泣いてないわよ！ 適当言ってるって背骨引っこ抜いて骨髓バンクに寄付するわよ！？」

「なんだよ……その脅し方……善人なのか悪人なのかわからねえぞ」

私が一瞬で思いついた脅し文句を聞いて微笑を浮かべる織斑一夏。

馬鹿な……私のとっさの一撃を笑って受け流した……？

化け物め……。

「で、何で泣いてたんだ？」

「だっ……だから泣いてないわよ！ 別に初日からミスしてクラスから浮いて孤独に精神を削られて、その後悔の念と居心地の悪さから朝食もあまり喉を通らずに泣きそうになったけど、無理してそれ

を我慢してたのに急に人生初の生きてる感じのする男に急に腕を掴まれて驚いたのと恐怖のあまりについ泣いてしまったとかそんなじゃ全然ないからっ!？ 変な勘違いしないでよ!？ もしもするようならあんたを拘束して遺伝子学者に無料でプレゼントして男性がISに乗るといふ男の夢に貢献するわよ!？」

「あ、あー……うん。俺の勘違いだったよ、お前は泣いてない。泣いてない。これっぽっちも泣いてない」

「そ、そうよっ……! 泣いてないっ! 泣くわけないじゃないの……この程度でっ……」

思わず声が後半震えたのは泣いているせいではない。断じてない。

「……お前も一緒に飯食おうぜ? 一人よりはマシになると思うけど……いや、お前がイヤだってんならいいんだが……どうだ? 来るか?」

曖昧な笑みを浮かべつつそんなことを言う織斑一夏。
……。

「……行く」



「そーいやさあ」

学食にて、未だに日替わり定食を貪り続ける織斑一夏は急に話題を振ってきた。

……え、私? 私はチキンナゲット二個とサラダ(小)とシェミハザが作ったサプリメント……のようなものを食し終わったわ。

正直言って食べ過ぎた。ほかの人と昼飯食べるってことでテンシ

ヨン上がって調子に乗ってしまったわね……。

今にも吐き戻しそう。……とりあえず昼休みは横になるしかないわね……動いたら吐く。即リバースする。

ちなみにシェミハザが作ったサプリメント的なモノは何か、食後に必ず三錠飲むように言われているのよね、一回何なのかネイサンに聞いてみたけど『お前の健康バランスを保つものだ』としか答えてくれなかったし、それっぽいからそれで納得してるけど……。

なんなのかしら、これ。市販のじゃなくてシェミハザ製つてのが引つかかるのよねえ……。

それに飲むと若干頭がぼーつとするし、眠くなるし。

……これサプリメントじゃなくね？

怪しい……怪しすぎる……。

と、思っても結局は飲むしかない、なんたって以前に何か怖くなつて飲まなかったら酷い頭痛に襲われたんだもの。

あの時は頭が割れて中から寄生虫でも飛び出すのかと思ったわ。それだけ痛かった。

「……なんだ」

私がまったく別なこと考えてる間に箒——篠ノ乃箒しのののというらしい、さっき自己紹介させられた——が味噌汁に口を付けながら返事。

マナーがなっていないな、生まれの悪さが滲み出してるぜ。

……というか、篠ノ乃しののの？　しののの……、デ

ユララ……シノノノノ！！……？

ゲシュタルト崩壊しそうな苗字だわ。……あるいはライトノベルみたいな……。

「ISのこと教えてくれないか？　このままじゃ来週の勝負で何も出来ずに負けそうだ」

「くだらない挑発に乗るからだ、馬鹿め」

何か言いたいけど言えない。

恥ずかしくも私は何も言える立場じゃない。

大変お恥ずかしい……。

「それをなんとか、頼むっ」

箸を持ったまま、ぱしりと手を合わせて箸を拝む織斑一夏。

……お前な、男としてのプライドは何処へ行ったんだ。

あんなに男のプライドプライド言ってたのに……。

もう少し努力ってものをしましょうよ。諦めるの早すぎ。

「……………」

そして無視する筈。……おお……なかなかサディ……。

「じゃあさ、織斑一夏。私が教えてあげましょうか？」

ふと提案してみる。

「……お？ あ、いや……別に俺は構わないけどさ、お前はいいのかよ？」

「構わないわよ。……で、でもっ、勘違いするんじゃないわよ!?!? 別段あんたを鍛えてセシリアに勝たせればセシリアを大笑いすることができるし、更に私があんたに勝っちゃえばセシリアを奴隷にできるとか一切考えてなくて、ただたんちよつとあんたと過ごす時間を増やしてみてあんたについて、もうちよつと知りたいか思ってるだけなん……う？」

……あれ、逆じゃね？

「い、いや……今のはちょっと……こう、語弊があったっていうか……ちよつとあんたに興味あるっていうか……」

……うん。

あれだ。

いや、何ていうか……、私ってもう誤魔化すのが壊滅的に下手なのかしら。それとも口がよく滑るのか……。

クソッ、この口滑りすぎる！ 誰よローション塗ったの！！ ふざけんな死ね！！ おなか壊したらどうするの！？

……しかしまあ、潤滑油を塗らなかったのは評価してあげるわ。

「うん？」

織斑一夏が極めて不思議そうな顔してこっちを見ている。

くっ……また失敗するのか、私は……。

失敗するのはイヤだ……またあの地獄に落ちるのはイヤだ……。

……私って結構メンタル弱い……？ もしかして。

「だ、だから……このI S起動時間五年を誇る私が手取り足取りI Sについて教えてあげるから……できればそのまま互いの絆を深められると嬉しいな、って言ってるのよ」

「……ん？ 最後の方はよく聞こえなかったが……、とりあえずI Sについて教えてくれるんだな？」

「そうって言ってるじゃない……」

どうやら最後の方は聞こえなかったようだ。助かった。……いや、助かってない。箒がものすごいにらんでる。怖い。

死ぬ。眼力で射殺される。

「ちょ、ちょっと……な——」

「ねえ。君って噂のコでしょ？」

私が篠ノ乃箒へと睨む理由を聞いてみようとしたところ。

それを妨げるのを狙ったかのように織斑一夏が三年生に話しかけられる。

ちなみにこの学園では学年ごとにリボンの色が違う。一年は青、二年は黄色、三年は赤。これを見て織斑一夏に話しかけた女子の学年を判断したのは言うまでもない。

癖毛なのか、やや外側に跳ねた髪が特徴的で、どこかイヌを思わせる人なつつこい顔立ちをしている。

……恐らく織斑一夏はリスとか考えてるだろうが……リスはそこまで人なつつこくないぞ。人間の持つエサにがついてるだけだぞ。ネズミとなんら変わりないぞ。ハハッ☆

しかし先ほど私を睨んでいた強面サムライガールとは対極に位置するわね……。

でも騙されるな織斑一夏、いつの時代だって一番身を案じてくれる人は一番自分に厳しくしてくれる人なのだから……。

こういう女は危ないぞ、織斑一夏！

「はあ、たぶん」

織斑一夏が適当かつ曖昧な返事を返すと、三年生は無駄に無駄のない無駄に自然な無駄な動きで無駄に隣にある無駄な席へと無駄にかける。

……本当に無駄だなあ……、今は私と織斑一夏（それと一人）が楽しくお食事してる時間だったのに……。

どうせ友人の一人や二人いるんだろうからそっち行けばいいのに。

「代表候補生のコと勝負するって聞いたけど、ほんと？」

「はい、そうですけど」

噂って広まるの早い。思わず戦慄する。せずにはいられない。

……『一組には頭のイッチまってるアルビノがいる』とか広まってるないよね？ ……ねえ？

「でも君、素人なんだよね？ IS稼働時間いくつくらい？」

私の予想だと……一時間くらいね、たぶん。

いやいや……いくらなんでもそれくらいは動かすでしょう……。

「いくつって……二〇分くらいだと思いますけど」

短ッ……。

アニメ一本にすら及ばない……だと……！？

「それじゃあ無理よ。ISって稼働時間がものをいうの。その対戦相手、代表候補生なんでしょ？ だったら軽く三〇〇時間はやるわよ」

短ッ……！？

なにそれ……え？ これ私がおかしいの？ 狂っているの世界？

それとも私？ プラスレス。

百の位で四捨五入したら私が44000時間でセシリア・オルコット、織斑一夏は0時間じゃない。

おお……、よかったな織斑一夏。セシリア・オルコットとお前は同レベルだぞ。勝てるかもしれんぞ。

「でさ、私が教えてあげよっか？ ISについて」

言いながら三年生はずいっと織斑一夏に身を寄せていく。
わーお大胆。

だけどな、先輩よ。放課後の織斑一夏との時間は私がすでに予約済みなのだぜ？

「はい、ぜ」

「結構です。私が教えることになっていきますので」

食事を続けながら、いきなり篠ノ乃箒がそんなことを言い出した。
……アレ？ そんな約束してたっけ？ いや、してない。

……何適当抜かしてるんだこのアマ……、放課後の織斑一夏との時間は私のものだ、私だけのものだ……！

いや、別にこう……一目惚れとかじゃなくて？ 興味があるって
いうか、何か教えてあげたいってか。

……まあ、うん……私も他人と関わりたいのよ。

「あなたも一年でしょ？ 私の方がうまく教えられると思うなあ」

「……私は、篠ノ乃束たばねの妹ですから」

死ぬほど言いたくなさそうに、それでもこれだけは譲れないとばかりに箒が言う。

……そう、そうなのよ。

この篠ノ乃箒はISの開発者にして世界最高の頭脳の持ち主……とシェミハザ機関が勝手に呼んで同人誌（大きいお友達向け）化してた人物の妹なのよ。

……しかし、まさか篠ノ乃束も予想はしてないでしょうね。自分たちがイギリスの端っこの方に固まってるイカくさい変態共の欲望のはけ口にされてるだなんて……。

ちなみに私も見せてもらったけど、正直言ってもう……篠ノ乃束

に同情するしかなかったわね。もしも……もしも会うことがあったら見せてあげよう。そして感想を聞いてシエミハザの奴らに教えてやろう。

むしろ写真撮ってメールで送ってあげよう。

「篠ノ乃って——ええ!？」

三年生はここぞとばかりに驚く。そりゃあなあ、ISを作った人の妹なのに全然知的な雰囲気ないもんなあ。

「ですので、結構です」

「そ、そう。それなら仕方ないわね……」

さすが世界的に有数であろう平仮名で書くゲシュタルト崩壊を起こしかねない苗字を持つだけのことはある……、その名前を出しただけで大抵の人間はたじろぐ。事実、親切っぽい腹黒（断定）三年生は軽く引いた感じで行ってしまった。しののの、しののの、しののの、しののの、しののの、しののの、しののの、しののの、しののの、しののの。

うーん、目が痛いぞマックス。

「なんだ？」

「なんだって……いや、教えてくれるのか？」

「そう言っている」

うんうん、美しきかな……幼馴染の友情……。

じゃないわよ。私を無視するなよ。

「ちょっと待ちなさいな、あんた……、いや、しのののほうき……いや、しーちゃんよ。織斑一夏には私が教えるからあんたはゆっくりしていいのよ?」

「……お前、話を聞いていたか？ 私は篠ノ乃東の妹で——」

「いつの時代だって兵士に武器の使い方を教えるのは開発者じゃなくて兵士……よ？」

「ぐうっ……」

イタいところ突かれた、みたいな表情を浮かべる篠ノ乃箒。
ハッハッハ。私はあの三年生ほど温くはないぞ？

……と、余裕ぶってみたものの、実質にはとても泣きそう。

……だってね？ 箒サンがね？ むちゃくちゃ怖い顔で睨んでるんだもん……。

ゴルゴ十三番か、お前は。

「……わかったわよ、一緒にやりましょ。一緒に……」

思わず眼力に負ける。

……だって、本当に怖いんだもん……。

……その後？ 聞き流した限りじゃ放課後に剣道場で何かやるらしいわよ。わあ、楽しみ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0956y/>

IS《インフィニット・ストラトス》～あるびのっ！ 祭～

2011年12月3日13時50分発行